
無辺の鳥かごで

Lotus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無辺の鳥かごで

【Nコード】

N5311D

【作者名】

Lotus

【あらすじ】

Warning: There is not an exit.

この世界から消え去る為に私はここにやって来た。なのに、私の予測は、希望は全く見当違いもいところ。また、生きる羽目になる私。
(全5話)

初めての『人』

プロローグ

こんな筈じゃなかった。あのイヤでイヤでしうがなかった毎日を、自分の人生において最大の勇気と決断でもってピリオドを打ったあの日から、私は楽に　本当はもっと凄く頭のいい感じに聞こえるうまい表現があるんだろうけど　なる筈だった。けど、これは何？　ここは何よ？　どうしてまだここに居なくちゃいけないの？　これってもしかして最悪パターン……って、違う！　そんな訳無い！　あんなゴミみたいな人生なんかよりすつごくマシに決まってる！

あの時、私は今まで経験した事無い程ハイテンションだった。いや多分、他人が見てもそれには気付かなかったと思う。だって体は静止状態だったし。でもちょっとは震えるくらいしてたかも。家の、自分の部屋で、椅子に座って。何も書いてない真っ白なノート広げて、勉強するみたいに、でもそれは見てなくて。少し震えて、でも頭の中はきつと脳ミソが、あの、何だっけ？　寝てる時に眼球がガッって動くあれ。あれの数倍の動きをしていたと思う。グルグルと多分、怪しいクスリをやったらあんな感じなんじゃないかと思う。で、ずっと妄想にふけてた。

絶対絶命のピンチに陥ったら私の中に眠ってる超能力が覚醒する。私は強くなる。何を言われてもへこたれない精神力。あんな痛みをものともしない身体。凄い！　凄いよ私！　それが手に入るかも知れないじゃない！　漫画の世界？　フン、もしそうならきつと

誰もが私を、私の力を漫画に描きたいって言うてくるに違いないの。映画化とかさ。手に入れたら宝くじの一等が当たった様なものよ。もっと凄いけど。

はずれたら　それでも私は全然構わない。だって、その瞬間私はこのイヤな世界から消えるんだもの。絶対、絶命のピンチなんだから。

あれからもうすぐ一ヶ月　。私の目の前には、代わり映えのない街の風景が広がってる。ほんとには建物とかごちゃごちゃした街で全然広がってるって感じじゃないんだけど。この一ヶ月近く、毎日同じ風景を見てる。もう飽きたんだけど、でもここにいなきゃ、って感じがするから、今日も。『今日』とか、変だな。『今』も。

私はずーっと、ずーっと、ここに立ってる。夜になったら帰って寝るとか、もう私には関係の無い話。二時間立ち続けたから十五分休憩とか無いし。『じゃあ、何で?』とか聞かれると思う。それは私が教えて欲しい事。ほんと、教えて欲しい。ていうか、もう命令して。あれやれ、これやれって。二十四時間一ヶ月近くぶっ通しで同じ場所に立つよりも辛い事なんてある訳が……。

いや　ある。あった。そうだ……あんな想いはもうしなくていいんだもんね……。まだ、マシか……。

私に命令どころか、話し掛ける人なんて居ない。第一、もうこの場所には誰も近付きたがらない……。

私はあの妄想の直後、真っ直ぐこの場所へ来た、と思う。で、その後はどこにも行っていない。最初の数日ここには普通に人が来てた。朝になったら通勤するおじさんとか学校行く小学生やら中学生か高校生が分らない制服の子達が。それだけじゃないけど。昼は買い物でも行くのか自転車にのった主婦みたいな人とか。夕方は帰って来る人。いっぱい居た。でもさすがに夜は……太陽が完全に沈んで真っ暗になる頃にはもうまばら。でもそれも数日だけ。夜には完全

に人が途絶えた。だって、ここには私が居るから。

凄くおかしく思えた。私は朝も昼も、明るい間もずっと居るのに。私に真っ直ぐ向かって歩いてくるおばさんとかをじっと睨みつけたりしてるのに。明るいうちは私が見えてない。完全無視。時には事もあろうに私の身体に重なってくる変な男まで居る。幾人もの男が私を通り過ぎていくゴニョゴニョみたいな詞があっただけ。確かにあの男どもは何も感じないらしく通り過ぎていくけど。

どこか凄く田舎の村で村人総出のお祭りの日に朝からハイテンションなお子様達のようにワクワク……じゃないけどこの身に起こった超革命的な出来事を境にかなり興奮気味だった私。でも、沸いていた私の血はわりと早くに治まった。ていうか、血なんて私には無かったんだ。

この身に起こった云々ていうのは確かだけど、その『身』はもうここには無い。私の血は最初の日になくなってた。お揃いの作業服みたいなのを着たおじさん達が私の身体を全部かき集めて拾い上げて持つて行っちゃったし、辺りを染めた私の血は綺麗さっぱり洗い流された。それを思い出したのは最初の日から数日後。

改めて思い起こせばその時、私は色んな感想をほぼ同時に持った。後悔とは違う。でも似てるかもしれない。まずは、何となくガツカリな感じ。だって、身体が無くなって全てが変わると期待してたのに、全てじゃなかった。私の時間が、繋がってる。『今』はあの辛い毎日の延長線上にある。もうあのイヤな出来事は起こらないとは思っけど、繋がっているのがどこかイヤ。あと、期待。変化した部分もあるのだからこれから何かいい事が起きるかも知れない。どこか楽しい場所に神様か誰かが連れて行ってくれるかも。身体を無くす前はすぐにその場所へ案内してもらえる事を切望してたんだけど、どうやらまだみたいだから、こればかりはどうしようもない。で、とりあえずはどうにもこうにもなりそうに無いし、その時に言えた事は、

（私はもう、生きていないんだなあ）

声にはならなかったけれど。

初めての『人』

ここには花がある。多分、一ヶ月程前のあの日から。その前には無かった筈。何度も通ってるけど見てないから。

今日の花は、新しい。一応女の子してきたのに花の名前に疎くてよく分からないんだけど、なんだか可愛い花が多いかな？ 可愛い花なんて無い！ とかいう人居そうだけど、ほら、お葬式で献花するやつとか地味なのあるでしょ？ ああいうのじゃないやつ。で、ここの花はどこかのおばあちゃんが置いていく。新しいのに変えるのは毎日じゃないんだけど、おばあちゃんは毎日ここに来てこの花を眺めてから、通り過ぎていく。杖をついてゆっくり歩いて行くから、なにかリハビリみたいなのかな？ これまた分からないけど。

この花は、私に、だ。かなりの確率で。他に理由なんて見当たらない。私の事はきつとこの周辺の人なら知ってる筈。新聞とか多分載っただろうし、テレビだって。私に、お供え。

今日の午前中、おばあちゃんは新しい花を持ってここに来た。いつもの様に花を取り替えて、おばあちゃんは手を合わせたらしないけどやっぱり今日もじつと花を見つめて無言だった。私はきまっておばあちゃんの隣にしゃがんで、一緒に花を見る。おばあちゃんの正面に立つべきか？ とか考えたけど、花は電柱とガードレールの間にあって奥はゴミだらけの小さな草むらだし、おばあちゃんは花を挟んで電柱を向いてるわけ。電柱とおばあちゃんの間はとも入る隙間は無いし、電柱の後ろじゃあ、変でしょさすがに。

だから、隣で見る。肩があったら触れるくらい近くで。でもおばあ

ちゃんはずつと真顔でこれといった表情が無い、みたいな感じ。

おばあちゃんは知らない人。記憶にない。でも、どっちかと言うと、好き、かな？　だって毎日来てくれる。昼間ならまだここを通る人は居るけど、立ち止まる人はそう居ない。私がここに来て最初の頃、私と同じクラスの子とかが親と一緒に来た。で、何か拜んで帰って行った。それから見てない。ずっと来てくれるのはおばあちゃんだけ。私を知ってたのかな？　わからない。

おばあちゃんと話せないかな　。

夜になつて人の気配が無くなった。遠くに見える明るいコンビニの前を歩く人の姿が小さく見える程度。一人の夜は長い。寝ればすぐ朝なのに、どうも私は寝られなくなつたみたい。休める身体がもう無いからかな？　辺りを改めて見回したら、溜息が出た。テレビや映画やその他諸々で見たり聞いたりした幽霊話を思い出す。夜な夜な近づく人間を怯えさせる悪霊達！　私は悪霊じゃないわ。全然。でも、やる気満々な悪霊達もお客が来なけりや食いつぱぐれだねえ……。いわゆる『やれやれ』ポーズで首を竦める真似をしてみる。ん……？

「あの、ちよつと？　今いいですか？」

「うわっ！　人だ！　人に見られた！　え！？　何を？　誰！？　ちよつ……」。

「落ち着いて下さい。あの、驚かせてしまつてすいません。って、落ち着いて！」

何！？　私が見える！？　子供！？　男子！？　うわ何！？

「分かりました。待ちます。じつとしてここで待ちますから、落ち着きましょう」

男子が！　男子が！　私をじつと見るー！！

そりやもう並みの驚きじゃなかった。特上でも物足りないくらいでもその男子、男の子がほんとにじつとして見るもんだから私は大急ぎで言葉を探した。だって、知らない男の子が急に現れて沈黙

のままずっと居るなんて、普通じゃない！ 何か、何か会話して自然な感じで……。

「ごめんなさい。そんなにびっくりされると思わなかったから」

私のあたふた感が治まってきたの感じ取ったのか 治まってないけど 男の子が言った。

「えと、あの、私が見える……？」

変な質問をしてしまった。この子がまっとうな人間なら何も無い暗がりに話しかけたりしない筈。

「もちろん見えますよ。僕だけじゃなく他の誰もが見てると思います」

え？ え？ 見られてる？ 大急ぎで周りを見回す私。

「いや、今は誰もいませんけど」

……紛らわしいこと言わないでよ。

「見えるから、夜は誰もここに来ないんですよ」

「あ、そうか……」

おっ、会話が成立したかな？これでなんとか普通にコミュニケーションが

「僕には昼でもあなたが見えるんです」

……。思い出せ、思い出せ私！ 昼間何か変な事してないよね私！

「あなたがそうなるようにしてるんですけどね」

男の子はそう言うのと細長い右手の中指を顔の前に持って言って、ついつとメガネのフレームを僅かに上げた。

男の子はごく普通のジーンズにごく普通の白いＴシャツ。細いなあ。背は私よりちょっと高いかな？ 歳近そう。髪は……暗くてよく見えないけど黒で、なんというかクリンクリンとハネてるな。メガネは銀のフレームで上下の幅が細いやつ。レンズ光ってる。かなり汚れを気にしないとあそこまで綺麗に光らない。私もちよつと前までメガネだったから分かる。今はコンタクトだけど。ん？今は違うか。でも何でこんなはつきり見えてるんだろう？ ド近眼だったのに。 って、そりゃそうだね。その出来の悪い劣等生は二人揃っ

て居なくなつたんだし。えーと、何の話だつたつけ？

「あなたの事はある程度知ってるつもりです。新聞でも読みましたし」

「あ、やっぱ新聞、載つたんだ……」

「佐藤明子さん。今年、十八歳になる筈だった」

……私の事調べて何するつもりなのよ？

「どうして」

「この近所の人はみんな知ってると思います。だって、あなたが住んでた町ですから」

私という人間が居る　それだけでしょ。新聞で知った人の方が多い筈だわ。どんな毎日を過ごしてたのかも。

「僕は、杉田義雄っていいいます」

「……どうも」

とりあえず会釈したつもり。ほんとにちゃんと見えてるんでしょうね？　この子幾つか？　質問してみようかな。

「あの、聞いてもいいですか？　歳」

年齢は重要。これによつてこの男の子とどう接していくべきかを決定する。私が。

「んー、僕の歳は……」

ん？　サバ読むつもりじゃないでしょうね？

「十……五、歳」

何？　今の間。

「本当に？」

「ええ。あなたの二つ下ですね」

「今年、十五になるの？」

「……えっと、もう誕生日過ぎましたし、十五ですよ」

「じゃあ、違う。三つ下よ」

フツ、いくら背伸びしたつてそれが厳然とした事実なのよ！　まだ中学生じゃない。

「でも、あなたは、十八にはならないでしょ？」

杉田君とかいうこの男の子は妙に大人びたというか、変な感じ。
なんだか、『何でも知っていますよフッフッフ』とか今にも言い出しそう。まあいいわ。何でも知ってるなら教えて頂戴。で……この杉田君は何しに來たんだっけ？

「何か……言つてたよね？ あ……私に何か用事とか？」

用事って。自分で言つといてなんだけど、用事って。この子は私がもう人間じゃないって知ってるのに何の用事よっ！

「あー、何て言つたら……。氣になつたというか……」
「私が？」

そりや氣になるわよね。見えてたなら。でも普通話しかけないですよ。取り憑かれたらどうしようとか考えるんじゃないの？

「あなたをずっと見てて、ちよつと様子が変だな、と」

「変……かな？」

「ええ、まあ。あなたは、あの名前で呼んでもいいですかね？」

あー、明子さん、とか」

え！ いきなり下の名前？　ちよつとそれは早過ぎないか少年！

「イヤですか？」

「えーと……佐藤で」

「わかりました。佐藤さん」

……残念がるとかはしないのね。

「佐藤さん、ずっとここに居ますよね。ここに來た日から、ひと月近く。で、ただ立つてるだけ。普通の表情で。普通の格好で」

普通でいいじゃないの。何か悪い？

「どうしてだろうと思つたんです。ここにこだわる何かがあるのかな？　って」

「別に……何も無いけど」

「何も無いのに居ちゃいけないとは言いませんけど、本当に何も無いなら驚きです。あ、いや、……そうだ。佐藤さん、この世界に未練があるとか、恨んでいる人や物ありますか？」

物に恨む？ どう恨むの？ ちょっと電車！ 痛いじゃないの！
とか？ 違うか。でも、そうだよ。私が今もここに居るのって、
天国に行けないのって、未練や恨みを残してるからって事になるよ
ね。

変だな……確かに憎い人が何人もいる。この世界で楽しく生きた
かった。でも、あの憎たらしい顔なんてもう見たくない。関わりた
くない。遠くへ行きたいって願ったのに、この世界はもういいと思
ったのに、何でここに居るんだろう？ どうして空から光が降って
きて私は浮き上がらないんだろう？ 神様は私をほったらかしにし
て何してるんだろう？

「佐藤さんがここで不慮の事故に遭ったというなら、何となく分か
ります。でも、……そうじゃない。だから不思議に思ったんです。
ここに居続けるのを」

「聞かれても私にも分からないよ……」

沈黙。彼、杉田君は何か考えている様にも見えるけど、これを聞いて
どうするつもりだったんだろう？ はっ、もしかして霊能力者！
？ 私を救いに来た！？ 十五歳！？ ……なんて、何考えてるん
だろ私。そんな馬鹿馬鹿しい。

「佐藤さんって、面白いですね」

「は？」

「だって、全然恨めしそうにしてないし」

杉田君は笑った様だった。よく分からないけど唇の端っこが上がっ
たから。

「不思議です。どうして……」

どうして……生きるのを辞めたのか、だろうな。多分。もっと悲愴
感漂う雰囲気で居るのが常識というものかな？

自分でも正直驚いてた。この杉田君が初めて会話した人なんだけ
ど、話してみてはつきりと実感した。私、あの日以前と全然違う。
喋り方はそんなに変わってないかもだけど、なんていうか、頭の中
ではポンポンと言葉が浮かんでくる。ちょっとハイな感じ。どうし

てかな？ 私って昔は頭も結構動きが鈍かった　成績は悪くなかったけど良くもなかった　と思う。うん。これは私も不思議。

「急にこんな事言って失礼だとは思いますが」

杉田君なんだかサワヤカ笑顔。暗がりです。

「佐藤さんが気になって仕方ないんです。また、会いに来てもいいですか？」

……告白？　人ではない何かに告白ですか？　もしかしてヤバイ人？　いやいや、最初からヤバイ人決定ですよ。

「まだ自分ここに居ますよね？　イヤですか？」

「いえ……いいんですけど……」

「良かった。じゃあまた来ます。あ、僕の事は『よっしー』と呼んで下さい。聞き慣れたあだ名なんです」

よっしー？　義雄のよっしー？　会ったばかりの私にそう呼べと？

君にはSの気が？

「それじゃ」

よ、よっしーはくりりと回れ右をしてキザな感じで持ち上げた手をヒラヒラと振ってここから立ち去った。

あの子、よっしーの家は近いんだろうか？　よく見かけた、みたいな事を言ってたしこの辺をいつも通ってるのかな？　私は今居る道のちよつと先にある公園に立ってる時計を見た。照明付き。今は夜の　十一時前か。十五歳……受験は？　勉強は？　あ、塾……でもないか。何も持ってなかったもんね。でもあの話し方といい、受験とか学校とかそういうの全然似合わない子だったなあ。よっしーは。

はあ。私は溜息をついて、そのまま長時間　普通の人の『長時間』より遥かに長い時間　固まった。

お花をあなたに

まだ陽が昇る前だった。暗いけど、私は気付いた。あれは……おばあちゃん？ 何故こんな時間に？ うん。どうみてもあのおばあちゃん。ずっと先のコンビニの前の通りで立ち止まってる。何してるのかな？ まだ暗いし危ないよ。じっと目を凝らす。

「うつ」

私は思わず声を出してしまった。おばあちゃんは こつちを見てる！

何で？ 何で？ あんな所で立ち止まって、真っ直ぐこつちを、真っ暗なここを向いてる！ 身体が！ 無いけど身体が強張る！ 顔が動かない。目が逸らせない。はつきりと見えるほど近くじゃないけど、おばあちゃんは私を 確実に見てる。

お、落ち着くよ、この距離でお年寄りに見える訳が……いや、まって。老眼って遠ければ遠いほど見えるんだっけ？ 何言ってるの違うでしょ！ 望遠鏡じゃないんだから！

「ひっ！」

また私は声を出して仰け反ってしまった。おばあちゃんが、歩き出した！

（こ、来ないで、来ないで！）

私は目をぎゅっと閉じて念じる。来ないで、来ないで！ あ、やつぱりダメよ！ 目を開いた時直前に迫ってたかどうか？ 逃げなきゃ！ そう思って私は勢い良く目を開けた。

おばあちゃんは、居た。通りにある角を曲がって、私のいるこの場所とは反対の方向へ、ゆっくりと杖をついて去っていく所だった。肩があつたなら、そこで息をしたに違いない。胸があつたなら私の人生はもっと、じゃなくて 早鐘を打っていたらう。おばあちゃんは完全に見えなくなった。なんとか落ち着きを取り戻した私は、何だか嫌な気分になってしまった。あの優しそうなおばあ

ちゃんに私は何て……。私の方が得体の知れない存在の癖に。おばあちゃんは何か用があつてこんな早くに家を出て来て、毎日通るこつちをふと眺めただけよ。きつと。それ以外何がある訳？　どうかしてた、私。あ……。

私は忙しく考えを出したり引つ込めたりしてる。私は夜は人から見える。だから人が来なくなつた。あの、よっしーもそう言つた。今は……。また振り返る。公園の時計は　午前四時四十分。普通に考えて、まだ夜じゃないの？　じゃあおばあちゃんに私は見えてた？　見えてたとしたら、どう思つたんだろう？　普通、怖いよね。私が居る事の方が怖いよね。おばあちゃんと私じゃあ……。明け方の四時台にお年寄りが散歩するのも、うん、ちよつと怖いけど。おばあちゃん、今日も来るかな？　もし来なかつたら……。私の方がびつくりさせちゃつたんだろうな……。そんな様子は無かつたけど……。

朝からずっとただ一点だけを見つめて過ごした。いつもあのおばあちゃんが姿を現す通りの角。大勢の人がそこから出て来たけど、おばあちゃんは……。来ない。もうお昼前。……。来ないのかな？　もう、二度と？

凄く、凄く寂しくなつた。悲しいよ……。あの優しそうな、ううん違つよ。花をずつとここに持つて来てくれる優しいおばあちゃん。そんなおばあちゃんにすら声も掛けられない。ただ怖がらせるだけの私。

嫌がられるだけの私　。

それが嫌だつたのに！
それから逃げる為にここに来たのに！
どうして迎えに来ないのよ！
いつまで待たせるの！

私はここに居たくないのっ！

早く私をつ！

私を消しなさい！！

この感覚。涙だ。凄く、リアルな感覚。不思議だな。今の私は本当に、物質的な肉体が無いというだけで、感覚は全てあるんだよね……。今までと全く同じ様に。変わって無いんだ、私は。多分もう机の角に足の小指をぶつけて悶絶する事は無いだろうけど、ほんと、そんなちっぽけな違いが生まれただけ。逃げ出す事も……。出来て無いんだ。

涙が頬を濡らしてる。鼻水、拭く必要無いね。忙しそうに前を通り過ぎていく人達を無視して私は、ぼろぼろと、だらだらと、泣いた。

また夜が来て、まだここに居て。私は何すればいいんだろう？ここに来たら何もかもが終わると信じて、来てみたら違った。じゃあ、次は？何か手が残ってる？無いよ。最後の最後、大事に仕舞っていた奥の手で、『どうだあっ！』とやってみたら、ス力だったって事。物凄い重大な決心だったのに。人生で一番勇気を出したのに。それに見合う結果がこれっぽっちも無いなんて理不尽よ。神様の怠慢だわ……。はあ。……。よっしー来ないかな？

普通、人には毎日色んな出来事があって、その中には楽しい事も幾つかはある訳だけど、私には出来事と呼べる事が殆ど無い。自分から動く事が無いし。だから今はおばあちゃんが来る事と、昨日不意に現れた杉田君、よっしーに会う事、この二つが、たった二つが私の日常に起こる出来事。おばあちゃんが来てくれたら、嬉しい。間違いない。よっしーは……。まだ会ったばかりだけど、多分この先貴重な知り合いになると思う。良く分かんない子だけだね。この二つってどっちも楽しみ。だから、つまり今の私の生活は幸福度10

0%な訳。強引というより無茶苦茶だけど、そういう事になるのかなあ？ って。……このままおばあちゃん来なくなったら、私の幸福度がいきなり半減。急落？ 暴落っていつのか。

（あ……、あれ？）

ぼんやりとコンビニの明かりに目を向けたら、人影。あそこに居るの、おばあちゃん？ おばあちゃんだ！ おばあちゃんが来てくれた！ 間違いない！ 昨日の、じゃなくて今朝のあの場所におばあちゃんが居る！

（おばあちゃん！）

私は心の中で思いつき呼び掛ける。全然、驚いたりなんかしないあの時は私がどうかしてたんだもん。きっといつにも増して馬鹿だったんだ。

そんな事考えながら、時間が過ぎていく。おばあちゃんはこっちを見てる。私を見てる。けど、ここへ来てくれる筈も無い。それに……夜。私は、恐怖の対象になる。でも、また来てくれたって事は……会いに、いや、見に来てくれた？ おばあちゃんは、驚いてるとかそんな感じじゃない。手を胸の辺りに持っていて、ただ、こっちを……。

（あ……）

おばあちゃんが歩き出す。また、今朝と同じ様に、角を曲がって……。

おばあちゃんの姿が見えなくなつて、一気に私の動悸は鎮まった。おばあちゃん、また会いたいよ……。話してみたい。

「こんばんわ」

「わあっ！」

「あれもしかして見えてませんでした？ あの通りからこっちに入ってきて佐藤さんに向かって真正面を歩いてたのに」

思い切り脅かしといて笑う男、よっしー。

「あらためまして、こんばんわ」

「……どうも」

ぶつきらばうに返してみる。この子、また来るとは言ってたけど、まさか次の日來るとは。いいんだけどね。別に。

「今日は、どうでした？」

「は？」

「何か、面白いものでも見ましたか？」

「……全然」

この子はこんな会話を友達ともするのかな？ 変だぞ、君。

「あなた、こんな時間に出てきて親とかは」

「ああ、全く平気です。えっと、僕の事は『よっしー』と呼んで」

「昨日聞いた」

「じゃあ、よろしく」

よっしーはニヤツと笑う。おまけにメガネもキラツと光る。分かりましたよ。

「さつき、佐藤さんを見てる人が居ましたよね？ 驚きです」

「え？ 見たの？」

「ええまあ。佐藤さんあの人、知ってます？」

「……知らない。あ、でも知ってる。ここにね、花を……持ってきてくれるの」

「なるほど……。気になるなあ」

「何が？」

「あのお婆さん」

……君は何でも気になるのかね？ 昨日は『私を』気になると言っただけな。

「お婆さん、見えてますね。完全に。でも怖がってなかった」

「そんな事、分からないでしょ」

「いえ、怖がってません」

よっしーはキツパリと言いつつ切った。

「不安、ちょっと違うかな？ 佐藤さんを見て思い詰めてるという

か……」

「そんな事……何でかな？」

「さあ？ あのお婆さん、佐藤さんの事は知らないのに花を供えてくれるなんて、優しい人ですね」

「……うん」

「まあ、佐藤さんが知らないからって向こうも知らないとは限りませんけど」

「……」

「お婆さん、きつと佐藤さんに会ってみたいんじゃないかなあ……」
「え？」

「よっしーの言葉に驚いた。私に会いたい……って、何で？」

「花を持ってくるのは、昼ですよ？」

「うん。昨日までは毎日ここを歩いてたの。運動の為、みたいな。その途中にここの花を見て行くんだけど、時々新しい花に変えてくれる」

「今日は？」

「今日は……ここには来てない」

「で、夜に来たと」

「あのね、お婆ちゃん、昨日、じゃなくて今朝のまだ暗い時間にも来たの。さつきと同じようにして帰って行ったんだけど」

「暗い時に、二度ですか……。この近所ではもう佐藤さんの事は知れ渡ってます。その……、『夜に居る』って」

「は……、だから昼も居るんだって。」

「お婆さんはやっぱり、佐藤さんに会いたいんですよ」

次の日、いや、よっしーが帰って行っってからずっと考えてた。お婆ちゃん、どうして私に会いたいのだろう？ 知らない私に。一ヶ月もさまよって 全然さまよってないし、もう定住しちゃってるんだけど 未だここに居る私を心配してくれてるのかな？ ここに居るだけで悪い事しちゃってるのかな……？

つと。よっしーだ。まだ昼間で明るいけど、何だろ？

「佐藤さん、ちょっとこっちへ」

「え？」

よっしーは私の真横まで来て少しだけ立ち止まって小声で言う。

「ど、どこに……私は……」

「いや、すぐそこですよ。あの公園の近くくらいならいいでしょ？」
公園。私が延々と立ち続けているこの場所から数十メートル。……
行った事無い。たったあれだけの距離なんだけど、私は行った事が
無い。何故かと言うと、上手く言えないけどほら、私みたいな状態
の人、って、ん？ 人かな？ とにかくちよつとその辺をぶらぶら
みたいな事はしないものでしょ。多分。だから、行ってない。すぐ
その公園。

「すぐ済みますから。僕、今から独り言を喋る訳ですから、ここは
人に見られやすいし変でしょ？」

そうだ。他人にはよっしーは見えるけど私は見えない。ここで会話
するとよっしーは変な子、いや、基本がそつみたいだからもっと変
な子に見られてしまう。

「うん……分かった」

よっしーが足を止めたのは公園の周りに植えてある大きな木、何
の木かは分からないけど、その近くだった。ここならいいの？ い
つもみたいにメガネを光らせてニヤついたら即、不審人物だけど…
…。

「佐藤さん。たぶんあのお婆さん、また夜に来ると思います」

「……どうかな？」

「まあ、絶対ではありませんけど。でもその可能性が高い。それで
ですね。佐藤さんは、あのお婆さんに会ってもいいと思いますか？」

「え？ えーと……あのお婆ちゃん毎日来てくれてたし、話が
出来たらうれしいかなあ、とか……」

「来るなら多分、今夜もでしょう。諦めてないなら」

「そんなの分からないよ。体調とか、他の、都合が」

「そうですね。まあとにかく。おばあさんがまたあのコンビニまできて佐藤さんを見ている様なら、僕が連れてきます。どうでしょう？」

「どっ、どうでしょうって、何でそんな事を？ それに一昨日は早朝で昨日は、えーと、宵の口って言うんだっけ？ おばあちゃん何時に来るかも分からないのに一晩中見てる訳にいかないでしょ」

「いや、その辺は上手くやりますから」

……『上手く』って、何？

「佐藤さんは、僕とお婆さんが来たら、ごく普通に、今みたいに普通に話しかけて下さい。笑顔なんかあったらいいかな？ それだけしてもらえれば、大丈夫ですよ」

「……声、聞こえるのかな？」

「姿が見えるという事は、今の僕と同じです。ちゃんと聞こえます。それに、佐藤さんに『話したい』という想いがあるんだから、心配要りません。届きますよ」

本当に十五歳か？ よっしー……。

「じゃ、そういうことで。勿論、今夜じゃない可能性もありますからそのつもりで」

そのつもりも何も、私には他に手の離せない用事がある訳でもないし、じつといつものようにしてるだけ。

よっしーは少し早足でさっき来た道を戻っていった。今からどこへ行くんだろう？ 今日、平日。学校は？ ん？ まさか登校拒否とか？ 違うか。普通そういうのって出歩かないよね？ じゃあ、不良！？ これも違うっばいなあ。……不思議な子。はっ！？ もしかしてオカルト研究会とか入ってたりして！ あのメガネの光り具合とかそれっばい！

……さてと。夜になったらまた来てくれるかな？ おばあちゃん。もし来てくれたら、何て言おう？ 花のお礼言っとかないかね。う……今から緊張する。

コンビニ。辺りが暗くなってその明かりが目立ち始めた。あそこの人、嫌だろうなあ、ここの近くで。最近は何騒だからコンビニ強盗とかにもビクビクしなきゃいけない上に、『出る』と噂のこの私、いつか挨拶にでも行っておけば、『ああ、いつもの人か』ってならないかな？ はは……。

時間は夜の……八時過ぎ。私達には早い時間だけど、あのおばあちゃんにはやっぱり……家の人もさすがに三日連続夜の外出は見咎めるんじゃない、あ、

（おばあちゃん……）

やっぱり今日も来てくれたんだ。おばあちゃんがコンビニの明かりの中に、来てくれた。

（おばあちゃん、私、会いたいよ。話したい）

おばあちゃんもそう思ってくれてるのかな？ だとしたら、すごく嬉しい。まだ聞いてもないのにちよつと笑みを浮かべてしまった私。……そうだ。よっしー、本当に居るのかな？ って、うわっ！

本当に出た！ よっしー！

よっしーが今、おばあちゃんに話し掛けた。一体、何て言って声を掛けたんだろう？ よっしー、上手くやってよ？ ……おばあちゃん、腰が引ける。確かにあれは、引くよね。よっしーがまだあどけない愛らしい少年だったらもうちよつと違ったろうけど、残念ながら……あ、どうかな？ 今、二人揃ってこっち見た。……手とか振るべき？ いやいや、止めとこう。それはちよつと、変だ。大人しく待つてよう。

ちよつと長く話してみたいんだけど、ようやくよっしーはおばあちゃんを説得、じゃなくて、んー、多分、おばあちゃんの不安を取り除いてくれたのかな？ 何を言ったらそんな事出来るのか分からないけど、二人寄り添うようにしてこっちに向かってゆっくり歩き出した。

あー、緊張する！ 私にとって二人目の人。言葉を交わす、二人目の。ちゃんと、話せますように。

心臓があつた辺りがバクバクと音を立てて、ちよつと足が震えちやつてるかも。普通この状態なら私とおばあちゃん、逆だよ。おばあちゃん、心臓大丈夫かな？ よっしーがおばあちゃんを半ば抱きかかえる様に支えて、私から少し離れてる場所で一度止まった。よっしーがずっと何かをおばあちゃんに言ってる。おばあちゃんを勇気づけてくれるのかな？ おばあちゃんは、そんなに怯えてる訳でも無いみたい。私と、初めて目が合った。

「あ、あの」

え、笑顔、笑顔で……。

「こんばんわ。お、おばあちゃん」

おばあちゃんは私の言葉を聞くと、一瞬びっくりしたみたいだったけど、その顔に、ゆっくり、ゆっくりと、優しい微笑みが広がっていった。

「こんばんわ。やっと、会えましたね」

「おばあちゃん……」

涙が溢れ出る。嬉しい、嬉しいよ！ おばあちゃん！

「なかなか、勇気が出なくてね……」

「おばあちゃん、ありがとう！ 来てくれて……私、凄く嬉しい……嬉しいよ……」

嗚咽が邪魔するおかげで言葉の最後の方は完全に声がひっくり返ってる。おばあちゃんも目に涙を浮かべてる。そうだよ。凄く怖い筈だもん。いくら私が普通にしていたって、怖くて近寄れないよね。ありがとう、おばあちゃん。

無意識の内に私はおばあちゃんの肩に手を伸ばした。伸ばしたんだけど、私の手はおばあちゃんの肩を素通りしちゃって、びっくりしたけどおばあちゃんに気付かれない様に直ぐに手を戻した。

「花……いつもありがとう、おばあちゃん」

「やっぱり見てくれてたのね……今度、また新しいのを持ってくるから……」

「……うん」

ほんとは花って高いだろうし結構頻繁に入れ替えてくれてるから結構な出費になってる筈だとは思っただけど、『もいい』とは言えなかった。ごめんね。

「私はもう……日課にしちゃったもんだから。毎日、ここへ来て、あなたと花を見るのが。ちよつとさぼっちゃったけれどね」

「え？……私と？」

「だって、あなたがここに居るっていう噂は、ひと月前のあの日からすぐ、すぐに広まったでしょう？　ここに来れば、あなたは居る姿は見えなかったけれど、きつとすぐ傍にいるんだろうって、思ってたわ」

「おばあちゃん……」

「花を、あなたにあげようって思ったの。供えるって言ったら、何だか遠い所に行ってしまった人に向けて弔意の証を立てて見せるって感じが私はするの。でも、ここに居るのなら」

おばあちゃんはちよつと俯いて、でもすぐにパツと顔を上げて。笑って。

「心が休まったり、楽しんだり、ちよつと微笑んだり出来るように、綺麗な花を『差し上げよう』って思ったのよ。綺麗な花を、あなたにね」

「おばあちゃん、私、毎日おばあちゃんが来てくれて、それが、それだけが楽しみだったの。きつとこれから、だよ」

「ありがとう。私も嬉しいわ。そう言っただけでいいよ。ただ……、あなたがずつとここに居る事があなたにとって良い事なのかどうか、私には分からないけれど……」

「その辺はまあ、気にしないでいいんじゃないですか？」

突然よっしー、この柔らかーな空気をメガネの鋭い光で切り裂いて乱入。ちよつとそれはひどいか。よっしーが居なかったらおばあちゃんちよつと話せなかったもんね。

「佐藤さんはここに縛られてる訳では無くて、自分の意思で居るん

です。何故かは僕にも理解出来ませんが。お婆さんも好きな時にここへ来れば佐藤さんが居る。きつともう、昼間でも見ようと思えば見えるんじゃないかな？」

「佐藤さん、素敵なお友達ね」

おばあちゃんが不意にそんな事を言う。素敵？ 『理解出来ない』
と言いつこの子が？

「はは……」

「あなたにも、ありがとう」

おばあちゃんは、よっしーの方を向いて丁寧に頭を下げた。

「あなたの言ったとおり、佐藤さんはとても素敵な可愛い女性ね」

うわ！ 何言ってくれちゃってんのよ！ よっしー！ なんて……
小っ恥ずかしい……事を。

「あなた達に会えて本当に良かった……ありがとう」

「おばあちゃん……」

「じゃあ、そろそろ……もう遅いですし、また今度でも」

よっしーがおばあちゃんに言う。え、もう？ まあ遅いけど。うん、
またいつでも、おばあちゃんが元気な日には会えるよね。

「そうね。じゃあ、今日はこの辺で……。佐藤さん、またね」

「おばあちゃん、気を付けてね。また……」

おばあちゃんはにつこりと微笑んでゆっくり振り返る。あらためて、
上品なおばあちゃんだなぁって思う。私も、もしここに来なかった
ら……なんてね。

「じゃっ」

よっしーが軽く手を上げて私を見た。わたしは軽く頷いて見せる。
(ありがとう。よっしー)

私は、何でしょう？

おばあちゃんと話した次の日、最初何だか照れくさかったんだ。

何でかなあ？ おばあちゃんは新しい花　小さな花束　を持って来た。片方の手は杖持たなきやいけないから。私、普通に手を振っちゃった。そしたらおばあちゃん、笑ってくれた。見えてる。見えてるんだ、私が。ふと、よっしーの言葉を思い出した。

『佐藤さんに、話したい　という想いがあるんだから、心配要りません。届きますよ』

……今の私は、おばあちゃんに会いたい、私を見て欲しい、知って欲しい、っていう思いが強いのかな？　だから、こんな明るくても見えるのかな？

今日はおばあちゃん、いつもみたいにすぐ花を置くんじゃないで、持って来た花が良く見えるように、私に差し出した。おばあちゃん、とっても可愛い花だね。ありがとう。それからおばあちゃんはいつもの場所にしゃがんで新しい花を古いのと交換した。私もいつものようにすぐ隣にしゃがんで。

「おばあちゃん」

私はそつと小声で、おばあちゃんにだけ聞こえる様に言った。

「なに？」

「おばあちゃんは私を知ってたの？　私が……ここに来る前に」

「ううん、あなたの事は知らなかったわ。私はこの近くに住んでるから、あの日、すぐにあなたの事を人から聞いたの。そしたら……

……どうしてかしらね、『すぐ行かなければ』と思ったのよ」

「……そうなんだ」

「ええ……、どうしてかしらね」

一瞬、おばあちゃんの表情が曇った感じに見えた。でもすぐにおばあちゃんは明るい声をだした。

「さて、ちよつとさぼってしまったから今日からまた歩かないとね」

言いながらゆっくり、杖に支えられながらおばあちゃんは立ち上がる。私は咄嗟に手を出して支えてあげようとした。でも、すぐに手を引っ込めてしまった。私では、おばあちゃんに触れられないからよっしーみたいにおばあちゃんの肩を持ってあげられない……。

「リハビリなの。私が鈍臭いものだから、転んで骨を折っちゃってね。足をね。ついでに腰まで痛めちゃって」

「え？ 大丈夫なの？」

「もう結構前なのよ。だからなるべく歩いたりして動かさないとダメだって、お医者様に叱られてるわ」

おばあちゃんは『フツ』って、これまた上品で、可愛らしい笑い声をもらった。カーワイイナー、ほんと。

「それじゃ、またね」

「うん。気を付けて」

そう、いつもの様に、おばあちゃんはゆっくりとここから遠ざかって行く。でも、今までとは全然違うんだ。だっておばあちゃんは、今までの知らない人じゃない。私の中でだけ、なんだけど、私のおばあちゃんだから。

それから二日が経った夜、私は人を待った。待ち合わせも何もしないんだけど、偶然来てくれないかな、と。いや、ちよつとイライラしながら。

（何やってんのかな、ちよつとくらい顔出しなさいよ！）

変だとは思っけど。こういうのって、逆切れ？ 違うか。逆恨み？

何で『逆』にこだわるんだ私。私に非なんてないわ。そして若干怒ってるわけ。……流行の言葉だとツンデ……？ うわあああ！ わたしわなにおいつてるんだあ！ 却下！ 棄却っ！

結局この日も来なかった。で、次の日、私の不安とイライラが一層募る。夜のコンビ二の明かりを見つめて。

（頼むから……来てよ）

そんな事を念じながら、待つ事数十分、一時間は越えてたかな？

（わっ、来た！ よっしーだ！）

コンビニの前に人影。うん、間違いない、よっしーだ。……じっと
見るのは変だから、もう少し近付いてから『あら？ よっしー？』
……うん。これでいこう。

予想通り、よっしーはコンビニを離れて真っ直ぐ、こっちへ向か
って来た。

「あ、あら？ よ、よっ」

「何ですか？ 『あらよっ』って？」

「言っていないでしょ！」

「そうですか？」

ニヤけてる。ふん、何考えてるんだか。

「あれからお婆さんは来てますか？」

「そうよ！ その話よ！」

「あ、あのさ、あの日の次の日は来たんだけど、その後おばあちゃ
んが来ないのよ！」

「そうなんですか？」

「うん……。夜も見えてないよ。気になっちゃって……」

「うーん、まあ、お年寄りだし、毎日は大変だと思いますよ？ た
だ歩くだけのリハビリでも結構辛いらしいですしね」

「うん、そうだよね……。ん？ リハビリって知ってたの？」

私、よっしーに話したっけ？ 夜におばあちゃん連れて来てくれた
時に聞いたのかな？

「いや……。でもお年寄りが毎日同じ所を歩いてるなら多分、そつい
う事なんじゃないですか？ 運動の為とか」

「うん」

「佐藤さん。僕、あのお婆さんの事ちょっと調べて、いや、調べる
とか大袈裟な事じゃないんですけど、ちょっと聞いたんです」

「え？ 何を？」

私は身を乗り出すようによっしーに注目する。私、おばあちゃんの
事は何も知らない。何だろ？

「あの、『ここ』で佐藤さんに言っているものかどうか……」
「何よ、言つてよ！」

「その前に、佐藤さん。ここを離れてどこかへ……あーこれもそんな大袈裟な事じゃなくて、ちよつと行動範囲を広げてみようとか、思いませんか？」

「え？ いや、思つた事、無いけど……」

「絶対イヤ、とかじゃない？」

「……まあ、必要に迫られれば、大丈夫かも……知れない」

「良かった」

「何で？ もしかして！ おばあちゃんに何かあつたの！？」

「いえ、おばあちゃんには何も無いと思いますよ」

「淡々と答えるよっしー。ああもう！ イライラする！」

「教えてよ！」

「じゃあ、言います。あのお婆ちゃん、二年程前に幼いお孫さんを亡くされてます。ここ。この場所で」

ちよつと沈黙して、私は思わず辺りを見回してた。ここで？ 亡くなつた？

「事故です。ここでお孫さんは、轢かれた……」

「そんな……」

人が、死んだ場所。その子が、自分の意思ではなく、他の『何か』に命を奪われた場所……。急に色んな事が頭に浮かんできて、混乱した。

（その子はどこへ？ 私は一度も見えてない。二年前だからもう居ないの？ 私がここに来る前、何度も夜に通つたこの道。一度も、何も感じなかった。怖くも無かった。噂とかも聞いた事が無かった。知らなかった。びっくりして、身体が、はじけて、壊れて、悲しくて、悔しい思いをしたその子は、どこへ？ ……おばあちゃん？ その子に会いたくて、ここに？）

「すみません。イヤな話をして……。でも、確かにここはそういう

場所だったんです」

よっしーはそう言っただけの傍に、ほんの少し傍に寄った。あ、そうか、よっしーは私を怖がらす事になるんじゃないかって思った訳ね。人が死んで、出てきそうな場所に一ヶ月、何も知らずに、昼も夜もずっと居た私。

「……うん、私は大丈夫。だってほら、私が怖がるのも変でしょ？」

「……」

よっしーは、私をじっと見つめてる。何か、顔に書いてあるかな？

「おばあちゃん……、あの花は……」

「違います！……お婆さん言っただじゃないですか。『ここに居る』佐藤さんに、花をあげようと思った、って。ここに居る間、ちよつとでも花を見て、微笑んだり出来るようにって」

……よっしー。あなた心が……読めるんだね。

「うん。ごめんね」

「佐藤さん」

よっしーは相変わらず落ち着いた声で、ちよつと力強く言った。

「お婆さんに、会いに行きませんか？ 今度は、こっちから」

……私が？ おばあちゃんに会いに行く？

「ここまで歩いてくるのは結構大変ですけど、本当に寝込んでもない限り、家の前くらいには出てくる事もあるんじゃないですか？」

「でも、……良く分からないけどもしかしたらおばあちゃん、この間私と話して、例えばよ？ その、亡くなったお孫さんの事がずつと胸の奥にあつて、だからここに来続けてたとかだったら、何と云うか……ごめん、整理できないよ」

「分かりますよ。言いたい事は。佐藤さんと話せた事で、ここに来続ける事を止める決心をした」という事ですよね？」

私は頷いた。

「でも、あのお婆さん、それでいきなりパツタリ来なくなるなんてあるかなあ？」

「……新しい花に変えてくれたの。あと、リハビリだつて話をして、確かにもう最後、つて感じじゃなかった。でも、帰った後にそう思ったのかも知れないし……。」

「でも、お婆さんの気持ちはともかく、佐藤さんはそれじゃ納得出来ないでしょ？」

「え？」

「言葉を交わしたのはほんの少しだけでも、急にサヨナラなんて、イヤでしょ？」

「でも、私がそんな事言うの……悪い気がする。私はおばあちゃんに何もしてあげてない。ただここに突っ立ってるだけの……。死んじゃったお孫さんの事を何も教えてあげられないし……。」

おばあちゃんから見れば、私とお孫さんは近い存在なのかもしれない。同じ様に、ここで。私がここに居る様に、お孫さんも居るんじゃないかと思つてたのかな？ でも居ない。私には分からない。「まあ、勝手に色々想像しちゃいましたけど、その内にまた来られるかも知れません。でも、今度は佐藤さん、あなたの為に、会いに行きませんか？」

私の、為に？

「お婆さんが『もうイヤ』つてはつきりそう佐藤さんに伝えたのなら別ですけど、そんなのは佐藤さんとお婆さんの間では考えられないですよ？ そんな出来事も無いんだから。いずれお婆さんがお孫さんを完全に吹っ切る為に、来ない事にすると決めるとしても、佐藤さんはその心境をはつきりと理解出来るじゃないですか。だから、仮にそうなったとしても、悲しい別れとは違う、もっと互いを想う優しい気持ちで、そうなるんじゃないかなあ。とまあ、思うんですよ。だから、話に行きましょう。もしかしたらお婆さん、そんな事とは全然別に、何か不安事を抱えてるのかも知れないし、とにかく聞かないと。佐藤さんもここで不安そうにくすぶってるより、納得！ すつきり！ ですよ」

……よっしー、熱が入ってるなあ。最後の方、ちょっと畳み掛ける

感、ありありだよ？　もしかして、私を何とかここから連れ出そうとしてる？　野外引きこもり中の私を。

でも、そうだよ。おばあちゃんは勇気を出して、私に会いに来てくれた。今度は私が、勇気を出さなきゃ。納得して、おばあちゃんと一緒に微笑んで、お互いがどうするのか、心に決める。分かった。分かったよ。よっしー。

私は初めて、この場所を離れる。これは変に緊張した。あの日以来の初めての行動。でもまだ良く知ってる街だから、マシかな。

午後。おばあちゃんが来なかったその日の。よっしーと一緒にコンビニの前。うわー、何だろこの感覚は。男の子と二人で通りを歩くなんて！　うーん、新鮮だ。けど、ちょっと恥ずかしい気もする。あの、『よっしー』なのに。そのよっしーは時折、『この店のあれが好きだ』とか、『あそこの工事が中々終わらない』とか一人で喋ってる。うん、文字通り、一人で。そうだね。確かあそこの道路工事、何ヶ月も前からやってたもんね。その継続が、私を少しブルーにする。

（変わらないなあ）

なんでも、よっしーの言うにはあのおばあちゃんの家を聞き込みで探し当てたらしい。なんとおばあちゃんは一人暮らししているそうで、ちょっと離れた街に息子夫婦が居るんだって。一人暮らしか……。そりゃ毎日の生活が大変だろうなあ。歩きに出られない事もきつとあるだろう。『ちよつと忙しかっただけよ』っていうおばあちゃんの言葉を期待してたり。

よっしーが、

「あそこですよ」

そう言っ指差したお家は、何とも立派な……。ちゃんと手入れされた垣根に囲まれた　馬鹿でかいお屋敷ではないけど　綺麗なお家だった。

「ねえ、ここに住むおばあちゃんの事を聞いてまわってたんでしょ

？ 絶対怪しまれてるよ？ 資産を狙った泥棒か何かに」

「はは、そんな下手は真似はしませんよ」

この子、一体どういう環境で育ったんだ……？

「じゃ、行きましょう」

よっしーがそう言って普通に正面の門を通って玄関に向かう。私も後ろに付いて。よっしーが呼び鈴を鳴らす。黙って待つ。再び呼び鈴。再び黙って。

「居ない？」

「さあ、出掛けてるんでしょうか？ ま、よくあることですけど。あるいは床に伏せて」

「変な事言わないでよ！ もう……」

「佐藤さん」

「ん？」

「入ってみませんか？」

「え？ だっ、駄目よ！ 勝手に……。それに鍵掛かってるんですよ？」

私は大きめの玄関にそびえるドアのノブに手を伸ばして、それをひねってみる。うん。閉まってる。

「出直そうよ」

「んーでもちよつと心配ですよね。お年寄りだから」

「あんたねえ！ 怒るよ!？」

「どうしてです？ 実際、こんな風になって大変な事態が起こってたなんて事は珍しくないでしょう？ あのお婆さんは歩くのも楽では無いし」

そりゃそうだけど、何で？ 何でよっしー、そんな事を言うんだろ？ 帰るのが普通じゃない。まるで、中の様子が分かっていると？

「……入れないじゃない」

「佐藤さんなら、入れます」

「は？」

「佐藤さんはこのドアを、通れます」

何言ってるの？　これを？　私は手を伸ばしてドアの厚そうな板に触れる。それから掌をぺたつとくっ付けた。ちよつと熱い。そこは陽が当たってる場所だったから。

「これを？」

私はよっしーに良く見えるように、二、三回ぺたぺたとドアを叩いた。

「お婆さんと初めて話した夜、肩に触れようと思いましたよね？」

……見てたのか。あの時、おばあちゃんの肩に手を置こうとした。ほんとは抱きしめたかった。でも、その前に確かめないと。私は、人に触れられるのか、を。で、駄目だった。

「佐藤さんの手はお婆さんの肩を素通りした。でも、このドアは触れる。何故ですかね？」

「それは……」

どうせもつともらしい答えを用意してるんでしょ？　よっしー。勿体ぶらないで言いなさいよ。聞いてあげるから。

「それは、そう決めているからですよ」

「え？」

「佐藤さんが。自分は人と違う。いわゆる、幽霊なんだ、と思っている。幽霊は人と触れ合えないと、どこかで見たり聞いたりして、思い込んでる。まあテレビとか映画とかそういうので」

「そんなこと……、じゃ、じゃあこのドアは？　幽霊って壁とか平気ですり抜けたりするじゃない。私はそう思ってた。今も……思ってるよ。なのに、これはどういう事なのよ」

私はもう一度、ドアを数回叩いて見せる。

「んーその辺はちよつと難しいとこなんですけど……ほら、感情とか精神とか複雑でしょう？」

よっしーは、ついつとメガネの位置を直して、私を見る。

「そう。あなたは、ここを通り抜ける事が出来るんです。あなたは、幽霊だから」

私は、なぜかショックを受けた。

あなたは幽霊だ。

そんな……。そんなこと今更……言わなくても。そんな分かりきった事を、何も知らない子供に教えるみたいに、言わないでよ……。「その……そんな言葉で……私は幽霊って事に目覚めて、力を発揮するとしても……？」

悲しい。悲しいよ。よっしーが、それを言うなんて。

「どうしてそんな事言うのよ！」

私は叫んでたかも知れない。よっしーにだけ聞こえる声で言ったのか、それとも他の人にも聞こえる声だったのかは分からない。深く考える間も無く、私は、驚いた。

「僕は！ 僕ならあなたに触れられる！」

身体が、締め付けられる。ちよつと強く。でも、痛くない。よっしーが、私の、無い筈の身体を、抱いている。

「どうして……？」

「どうして……？」

よっしー？ ちよつと涙声かな？

「あなたが……僕の事を他の人とは違う　そう、思っているから、だと思います」

他の人と違う？ どこが？ ……なんてね。……そうだね。よっしー、初めて私に声を掛けてくれた時から、もう、私には、……特別だったね。

「すいません。はは……」

よっしーがそつと私から離れて、頭を掻いている。

「まだ話さなきゃならない事が沢山あるんです。その、佐藤さんのこれからとか、考えなきゃいけない事がいっぱいあるし、あ、これは、僕がそうしたいんです。えーととりあえず今は突っ込まないで下さい。ただ、あなたと一緒に色々考えたり、僕に出来る事が……。はは、何言ってるでしょうね。ただ、佐藤さん、とりあえず今、

佐藤さんはどういう状況なのか、考えてみませんか。……このドアがどうかは、直接的にはあまり関係無い事かも知れませんが、佐藤さんの自分に対する認識とか、その辺から始める為の第一歩になると思うんです」

…… よっしー、難しい事言うのね。でも何となく、ぼやぁんとだけど、分かるよ。言いたい事。

「でも、教えてもらわないと、まだ何も分からないよ……」

「このドアを通り抜けることは、凄く簡単だと思います。佐藤さんの認識ひとつですから。佐藤さん。僕と握手してもらえませんか？」

「え？」

「何なら、もう一度、抱きしめ合っても…… 今度は佐藤さんの方から」

「……握手で」

私が言い終わると同時に、素早くよっしーが手を差し出した。普通、こんなシチュエーション無いよね。まるで、その、何でもない私も手を伸ばす。私が、よっしーの手を握る。

「僕は、あなたと違わない。傍に居て、触れる事の出来る人間です」

「……うん」

「不思議ですよ。身体は本当は無いのに、僕には見えて、佐藤さんの体温を感じる」

「……うん」

「多分、佐藤さんの、身体じゃない部分、生命の能力なんですかね」

そういう難しい事は分からないけど、とりあえず握手はもういいんじゃない？

「身体が無いなら、遮る物はない。ぶつからないんだから」

「そうだね。でも……」

「もう一度ドアを触れてみて下さい」

…… ぺた。ドアだ。左手で押したり撫でたりしてみる。だって右手、よっしーが握ってる。何だか、『離すつもりは毛頭なし！』な感じで。別にいいけど。

「どうなってるのかなあ」

よっしーは私の左手とドアのくつついた辺りを覗き込む。私もちょっと顔を近付けてみるってわお！ 近い！

「佐藤さん、この手は佐藤さんの生命が生み出した、言わば擬似的な物です。佐藤さんが、必要だと思ったから、出来たんです。必要な時にいつでも用意出来る」

「なんだか滅茶苦茶な存在だね、私って」

「でもこの左手、今、要りますか？ ほら見て下さい」

よっしーは私の左手に息が掛かるくらい顔を近づけて観察してる。私も仕方なくまた、顔を近づける。

「ドアがこの手を押してる。ドアは邪魔だなあ。ドアの分際で生意気な」

よっしー、大丈夫？ 頭。

「今の佐藤さんの身体、佐藤さんの生命の前には物質なんて無いも同然。屁でもないですよ」

「……逆じゃない？ ドアの前には私は、居ないも同然……うわっ！」

びっくりした！ 左手、私の左手は？ あった。私の左横に。手が、ストンと落ちた。

「はは、逆でしたね。ドアにとっては佐藤さんは居ないんだから、阻む必要なし！ な訳ですよ」

急によっしーが掴んだままだった私の右手を離して肘の辺りを持ち上げる。今度は後ろに回って私の左腕をも……。私は、あの前へ覚え状態で、え？ 私の手、ドアに同化してる！？

「ほら、何でもない。佐藤さん、好きな様にし放題ですね」

よっしーが私の両腕で遊んでる。近いし、ていうか、いや、近いね。そんな事よりも、私の手はドアに埋まってかき混ぜてみたいに上下左右に動く。ドアは壊れない。

「凄い……これ、凄い！」

さすがに私は興奮してきた。何だか凄い超能力みたい！

「佐藤さん、これは当然なんですよ。健康に育った人間が普通に歩いて『今日も歩けるぞ！』って感激する様なもので、確かに感謝してて良いんですが、毎日そんなに興奮してたらさすがに疲れますよ」

よっしー、笑ってる。

「だってほら、見てよこれ、凄い！」

何だか嬉しい。楽しくなってきた。んー、そう、まるで遊園地にデパートで行って、ちょっとスリリングな乗り物で興奮気味の私を、彼が笑いながら眺めてる、そんな感じ。例えだから、例え。あくまでも。

でもよっしーは、ほんとそんな風に、笑ってた。

心とカラダ

「じゃあ、行ってみましょうか」

「ん？」

「中」

あ、そうか、私、入れるんだね。おばあちゃんのこの家に。でも、勝手に入るのはやっぱり気が引けるけど……。

「誰も居ないなら、どうってことありませんし、佐藤さんならちょっと意識するだけでほぼ完璧に気配が消せますよ」

「そうなの？」

……人であるよっしーに聞くなんて、我ながら情けない。でもよっしーって何でここまで色んな事、特に私の様な存在に関する事を知ってるんだろう？ ……やはりオカルト研究会？

「じゃ、よろしく」

「う、うん」

私は恐る恐る、ドアに身体を押し付けて 押すって感覚は無いけど 埋まっていった。

「う、うわぁ……」

変な感じ。でも直ぐに視界が元に戻って、玄関の中の様子が目に飛び込んできた。静かな廊下。綺麗に磨かれた床が、正面の奥に見える窓からの光を反射していた。

（お邪魔します……）

私は廊下にかかる。ん？ まてよ？ もしかして私は、あのドアみたいに床もすり抜けて落っこちるんじゃないでしょうね？ そっと足を床に下ろす。……落ちない。堅そうな床。でも？ すり抜ける事も出来る？ 私は試しに、さっきのドアの時と同じ感覚を もつろ覚えただけ 思い出して、ほんの少しだけ体重を掛けてみる。

「あっ！」

足が、くるぶしまで沈んでる。なんだか、笑えた。やった。

さて、あんまり慣れて床の上を歩けなくなっても困るからこの辺にしといて、私は先に進む。どの部屋も入り口のドアやふすまは開け放たれていて、良く見える。そして人の気配は無い。外から見たとおり、広くて部屋がいっぱいあった。でも、割とすぐに分かる。誰も居ない。二階は？ このお家は二階建て。でも、おばあちゃん、二階に上がるかな？ ちょっと無理なんじゃ……？ でも一応見ないと。私はそつと二階へ上がる。

上がってすぐの所にある部屋、ドアが閉まってる。……どうしよう？ 開けてみる？ でももし中に誰か居たら、びっくりするよね。うーん。静かに近付いて、耳をドアに当ててみる。音は……無し。……このまま、すり抜けてみようか……でも、中からだとう見える？ ドアからまず、私の鼻がじわじわと出てきて、顔が……そして目がぎよろつと中を見回して……。

（いやー！！ 怖すぎる！！）

自分の想像に身を震わせる私。絶対ヤダ。……じゃあどうしよう？ もしどうにかしておばあちゃんがここまで上がって来てこの部屋で、倒れてたりしたら……。見なきゃ！

私は覚悟を決めて、ドアにまず手を触れさせて、通れる状態になる事を確認する。そして額から、徐々に前へと進んだ。ドアは薄かった。すぐに中の状態が一目で確認出来た。誰も居ない。私はそのまま中に完全に入る。子供部屋？ 学習机。戦隊ヒーローものつていうのかな？ あれの写真がパネルになって学習机の本棚の下に貼り付けてある。おもちゃが片付けられた箱。おばあちゃんの……お孫さんの？

きつと、当時の、二年前のままなんだろうな。でもおばあちゃん、もしかしてもう上がって来れなくて、この部屋も見ることが出来なくなってたんじゃない？

（おばあちゃん。おばあちゃんを探さないと）

今度はドアを開けて廊下に出る。二階にはそんなに部屋は無い。

ちょっと行けば、すぐに誰も居ない事が分かった。階段を下りて、真っ直ぐ玄関に向かう。同じ様にして出ないと、鍵閉められないなもう一度。外にはよっしーが居る筈。あのじわじわ出てくる顔だけは見せられない。私は勢い良く外へと飛び出した。

「ん？ よっしー？」

玄関の前には誰も居なかった。

「おい」

辺りを歩いてみる。ん、居た。家と垣根の間にあった物置の陰に、ひっそりとよっしー。

「何してんの？」

「あ、いや、さっき前を人が通りかかったから。あそこだと待つてるのも不自然だし。で、どうでした？」

「おばあちゃん、居なかったよ……」

「そうですか。一人暮らしなら買い物とかも行かなきゃならないし、そういうことでしょうね」

「でももう、暗くなるよ？」

「とにかく、戻りましょうか。道中会うかも知れないし」

私とよっしーは来た道を戻っていく。途中、スーパーがあつたから二人で入ってみる。おばあちゃん来てないかな？ 結構大勢な人でもおばあちゃんの姿は見当たらない。今度はちょっと回り道をして商店街の方へ行ってみる。お年寄りが多かったけど、あのおばあちゃんじゃない。私が、『あっち』とか『こっち』とか色々言うのによっしーは付き合ってくれて、かなり歩き回った。初めてだな。あの場所を離れてこんなにくろくろするなんて。私は全然平気だったけど、さすがによっしーは疲れたかも。

「佐藤さん、また明日、お婆さんの家行ってみましょう」

「……うん」

二人がコンビニの前まで戻ってきた時には、殆ど陽は沈んで、もう夜になるところだった。

「もしかしたら、いつかの夜みたいにおばあちゃん来てくれるかも

しれないな……」

私はそんな願望を込めた独り言を口にして、慌てた。

「あ、今日は、ありがとう。その。もう疲れたでしょ？ ごめんね」
よっしーも一緒に待って欲しいとか、そういう意味じゃないから、
帰って休んで。

「……いや。じゃあまた明日。あ、それから、あのドアのすり抜け
るやつ、ちよつと練習して慣れればもう自在に出来るようになるん
じゃないかな？」

「そうだね。はは、あれ、便利だね」

「悪用はしないように」

「あはは、何に使うのよ」

「それじゃ」

よっしはいつものごとく、手をひらひらさせて歩き出す。おっと、
私ももう戻らないと。こんな所で姿を現したらみんなびっくりする
な。ん？ でも、私を知らない人なら、居ても何とも思わないんじ
やないの？ ……あそこにずっと立ってるから、怖いんであって。
……でも、まあ今は、戻ろう。

私は、いつもの定位置目指して歩き出す。歩くのって、楽しいな。
今は疲れないから楽しいのかな？ 多分、そうね

足が軽い。軽快に足を繰り出して進む。通りから離れれば離れる程
暗くなっていく道。そんな中

（ん？）

前に、……誰か居る？ 動いてる人影。歩いてる？ 私と同じ方向
に歩く人。ちよつとゆっくりで……。もうこれだけ暗くなったら来
る人なんて居ない筈。もし今日わたしがよっしーと出歩かなかつた
ら、あそこで私を見た筈。あの人、ラッキーだね。怖い思いしなく
て済むもん。私は早く行って追いついたりしてしまわないように間
隔を確保して。

そのまま暫く行くと、その人は道を左に曲がって行こうとする。

（あれ？ あそこ、左に行く道なんてあつたっけ？）

この道はこのまま真っ直ぐと、右に折れる道でＴ字路になっている。角に公園があつて。あそこ……あそこつて！ 線路！ 間違いない！ あの人の曲がつたのつて、踏み切り！ あの人の線路に入つて行つちやつた！

私は早足でその人の後を追う。まさか線路の整備する係の人とかじやないよね。明かりも持っていないみたいだったし。踏み切りの所にひとつ照明があるだけで、あの人が入つていった方にはしばらく行かないと次の明かりは、無い。……もしかして、もしかして！

私と同じ様に？

走る。私は走り出す。あの人がどういうつもりなのか分からない。それでもとにかく！ 急がなきゃ！ 踏切まで数十メートル、百はない。とにかく走つた。まるで踏み切りにゴールのテープが張つてあるかの様に。そして、踏み切りまで到達しようとしたその時、

『カンカンカンカン』

まるでゴールを祝う鐘の様な音が響き始めた。

（うそ！？）

あの人は？あの人はどこまで！

明かりが何も無い暗がり。居る！ ゆっくり線路の中央を歩いてる！

「待つて！」

私は叫ぶ。でも、その人は全く反応せずに進む。私は再び駆け出す。「電車が、電車がもうすぐ来るのよ！」

叫び続けながらその人に近付いた。ゆっくり進む人。一定のリズムで出される、杖？ 少し丸まった背中。

「お、おばあちゃん！」

何で？何でこんな所にいるの！ どこへ行くの！ ダメよ！ ダメなのよ！

私はすぐに追いついた。おばあちゃんに。でも、おばあちゃんは全く私のほうを見なくて、ただ、前を。

「おばあちゃん！ 私よ！ 危ないから戻って！ おばあちゃん！」
私はおばあちゃんの肩を掴もうと両腕を出す。

「えっ？ 何で？ 何で!?」

私の手がおばあちゃんの肩に留まらない！ 掴めない！ 何でよ！
私はおばあちゃんの前に立ちふさがる。

「おばあちゃん！ 私！ 見えるよね？ おばあちゃん！ こつちを、私を見て！」

その瞬間、おばあちゃんを目じゃなくて、光、強い光が遠くから私に向けられた。目がくらむ程の、電車のライト。一瞬息をのむ。

「おばあちゃん！ 返事をして！、私に気付いてよ！」

「佐藤さん!?」

不意に私じゃない声。

「佐藤さん！ どうしたんですか!?」

よっしー！

「おばあちゃんが！ おばあちゃんがここに居るの！ 私が、見えないのよ！」

踏み切りからよっしーが飛び出してくる。長い直線の線路だから電車のライトは遮られる事は無い。よっしーの顔は全く見えない。強い逆光で。こつちに走ってくる。でも……電車が……。

「おばあちゃんが！ おばあちゃんが私には触れないの！ 触れないのよお！」

「佐藤さん落ち着いて！」

「プアアアアアン」

警笛が響く。思わずよっしーが電車を振り返る。もうどれくらいだろう？ 電車って結構なスピードで走ってるよね。特に直線。

「もうダメよ！ 逃げて！」

よっしーがここに来るのが早いか、電車が先か、もう分からない。

「おばあちゃん！ こつち！ こつちよ！」

私はおばあちゃんの前で横の草むらへ行こうと促す。ちょっと避け

るだけで助かる。

「おばあちゃん！ 何で！ 何で聞こえないの！？ 話したじゃない！ なのに！」

「佐藤さん！ 気持ちを落ち着けて！ あなたは、おばあちゃんと話せるし、触れられる！ 信じて！」

よっしーも叫び声で。

「おばあちゃん！ 死んじやだめだよ！」

もう、すぐ。

「おばあちゃん！」

私は、身体をおばあちゃんに思いつきりぶつけた。おばあちゃんを助ける。助ける為に必要な物は。

そして確かに私はぶつかった。おばあちゃんに。とにかく夢中で足元がどんなふうになっていたのか分からないけど、私は線路脇の草むらに飛び込むようにして突っ込んで、転がった。胸に重い感覚。必死になって力んでいる私の腕の中には、おばあちゃんが居た。

（助かった……）

ぼんやりと見上げる眩い線路。電車が……通過する……。

「え？」

私の視界にあつたのは、……よっしー？ よっしーが飛び出してる！？ 私を見て、おばあちゃんを見て、安堵の表情で……そして、その姿を一気にペンキで塗りつぶすように、電車の薄い水色が覆った。

「よっしー！！」

見間違いじゃない。よっしーは確かに線路の上に居た。向こう側じゃない。私は目を思いつきり見開いたまま呆然としていた。そして電車の最後の車両が、通り過ぎた。

「……はは、助けられましたね、お婆さん」

私の目はずっとそのまま。口も開きつ放し。でも、更なる衝撃映像に頭がどうにかなりそうなところまでショックを受けて……。

電車が通過する前と同じポーズの、よっしーが、そこに居る。…
…どういう事？

「佐藤さん、電車が止まりますよ！ 急ぎましょう。今ならまだ間に合う！」

え？ 急ぐって……何を？

「佐藤さん！ ほら、早く。杖、持ってください。僕がおばあさんを……」

よっしーがおばあちゃんを抱きかかえる。

「これは……結構きつい……」

よっしーは細腕を震わせながら線路に上がって踏み切りの方へ向かう。

「佐藤さん！ 何してるんですか。電車の人、運転手か誰かが降りて来ますよ！ かなり煩わしいことになります！ 早く」

「う、うん」

私もようやく事態が飲み込めて、慌ててよっしーを追いかける。私は派手に草むらにダイブしたけど、怪我は無い。怪我をする性能を持つ程の身体を再現する能力は無いから。おばあちゃんは、大丈夫だったろうか？

「よっしー、おばあちゃんは？ 大丈夫かな？」

私はよっしーの傍でおばあちゃんの顔を覗き込む。微かにうめく様な声がおばあちゃんの口から漏れている。

「急いで病院に行った方がいいですね。素人が見た目で判断なんて出来ませんから。道にうずくまっていたのを見つけたって事にしましょう。場所は……あの踏み切りじゃなくて、コンビニの横の角で」

「うん」

「それから、」

よっしーの息が切れてる。小柄なおばあちゃんだけど、赤ん坊を抱くのは訳が違う。かなり重労働。

「初めてですね。佐藤さん、『よっしー』って呼んでくれたの」

「え、あーいや、そうだったけ？」

「何ていうかこう、佐藤さんがぐつと近くなつた感じですよ。もうそろそろ僕も、明子さんくらい呼んでも」

まだ早いわっ！小僧！

「馬鹿な事言つてないで急いで！」

「い、急いでますよ。電車のほう、どうですか？」

私は電車が停止している場所に目をやる。もう結構離れたから人影とかは見えない。

「人は見えないなあ」

「ま、あの辺をしばらく搜索するでしょうけど、大丈夫ですよ。何も無いんだから」

なんとかコンビニの所までたどり着いて、コンビニで救急車を呼んでもらう事にした。念のために私は表で待つて、よっしーがおばあちゃんを抱きかかえたまま中に入った。待つこと数分。救急車つて意外に早いんだね。どこから来たのか知らないけど。すぐにおばあちゃんは救急車に乗せられて、よっしーは救急隊の人に乗るように言われてたけど、何か言つて断つてた。

「明日、病院行きましょう。市立総合に向かうそうです。一人暮らしだし、まあしばらく入院になるのかな？」

「……そうだね」

救急車が走り去つて、しばらくそつちの方向を二人して眺めてた。よっしーももう帰るよね……。私、もうあそこに居るの、ヤだな……。もうちよつと……。もうちよつとだけ……。あつ！ そうだ！ よっしー、怪我は？ っていうか、アレ、何だったの？ 聞かなきゃ。

「ねえ」

「佐藤さん」

「え？」

「ん？」

ああ！ もうこついつの凄く煩わしい！ だから私は即座に口を

閉ざす。

「なんですか？」

よっしー、ニコニコしてる。OK。私が先ね。

「あのさあ、あの線路の上で……まともに電車にぶつかった様に見えたんだけど……。よっしーが」

「……え？　そうですか？」

「……見間違いだったのかなあ？」

「まともにぶつかったのなら、無事では居られませんね」

「……そうだよねえ」

私は簡単に話を切り上げるつもりは無かった。私はじつと、よっしーの顔を、目を見つめてる。よっしーも気付いて見つめ合っちゃってるんだけど、私はそんな事より、あの時のよっしーの状態の方がとても重要で、知りたかったから。

「あのさ」

「佐藤さん」

……。

「なんですか？」

「今度は、よっしーからでいいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて。佐藤さんどこか遊びに行きましょう。今から」

「え、今から？」

「だって、明日病院に行くまで、暇ですよね？」

「私は、そうだけど……。よっしーは？　暇なの？」

あなたも……。『私と同じ様に』、暇だったりする訳？　他にしなきゃいけないことは、何も無いの？

「暇ですね。僕、かなり自由ですから」

「何それ」

「そうだ、ちょっと足を伸ばして朝までやってるコーヒーショップにでも行きますか？　かなり粘れますよ。よく行く所があつてね」

「……朝まで居るの？　私と？」

「あー、佐藤さんがよければ、ですけど……」

そうじゃない。そういう事じゃなくて。朝まで一緒に、なんて別に構わない。そうじゃなくて、よっしー、あなたは家に帰らないし、寝ないって？ で、今日は昼間、私と一緒に、明日は昼間から病院行って？

「佐藤さん？ あの、何か……怒ってます？」

「えっ？ ううん、あ、でも、ねえ。よっしー？」

「はい？」

「その……あなたって……」

何て言おう？ 今、すごく、よっしーの事が知りたい。素性が知りたいって意味よ。で、もう、予想は……。普通なら馬鹿馬鹿しいと考え直すんだろうけど、じゃあ、私は？ って思っ……。

「佐藤さんの言いたい事は、察しが付いてるんですけど……」

「えっ？」

……。

うわっ！ 今度は、何だか恥ずかしいぞっ！ こんな所で、見つめ合っちゃって！ これじゃあまるで……。

「行きましよう。朝まで時間はたっぷりありますから、話しますよ。佐藤さんが聞きたい事を。一緒に行ってくれたら」

「……喫茶店くらいならね」

「決まり。じゃあ行きましようか。ご案内します」

よっしー、左手をずっと差し出して。……どこ行くのか知らないけど、手をつないで行く訳？ 人が見たら……。あ。今、見えるよね、私。私を知ってる人が見たらびっくりするよね。でも。知らない男の子と手を繋いでる光景って、どうなのかな？ びっくりするけど…… あそこでぼっと立ってるよりは、全然いいよね？

しょうがない。お姉さんが、手、繋いであげるよ。

廣大無辺の、自由なカゴ

私は眠くならない。こうなってからまだ一ヶ月程だけど、眠くならないと、寝ないと、一日がものすごく長い。正直言つて、時間を持て余す。もし普通に身体があつて、ただ睡眠だけは必要ないって状態に突然なつたら、きっと、人は疲れ果てる。恐らく深く考えないまま今までの倍の量、時間、動こうとするから。今までやっていた仕事なり何なりを、速度を半分に落としてのんびりやれば　つまり仕事の量は同じで　きっと問題ない。でも、我慢出来るかな？　許せるかな？　あまりにも怠惰な自分が。ほんとには怠惰でも何でも無いんだろうけど。

私は眠くならない。しかも疲れもしない。じゃあ、今までの倍、動くのが当然で、同じだつたら怠けてる事にならないだろうか？でもそんな事言つたつて、私は会社に勤めてる訳でも無いし、学生でもない。今は。何をすればいい？

自分で見つけろつて？　ねえ、私さ、生きるの、辞めたんだよね？　ちゃんと、辞められたんだよね？

よっしーは、全くと云つていい程、勿体ぶらなかつた。本当に私の聞きたい事、聞きたい言葉を、私に、告白した。でも、初めて聞く言葉じゃなかつた。おばあちゃんの家に行った時、よっしー、言つたもん。

『僕は、あなたと違わない』

既に聞いてた言葉なんだけど、でもね、凄く、ドキドキしたんだ。普通の、生きている人には、『それが何？』なのかなあ？　反発してしまうかも。『同じつて何よ！　私はあなたとは違うのよ！　私の事何にも知らないくせに！』とか。でもね、私には違つた。それは、凄く聞きたい言葉だつた。言ってくれたら、私、その、何ていうか……。まるでよっしーが、私の事を『好きだ』って言つたつ

てくらい、嬉しかったんだ。

……ん？ あ、違う！ そうじゃないって！ よっしーは好きだなんて言っていないしだから私も嬉しくなんか、ってまた間違えてるし！ 『好き』と『嬉しい』は忘れて！ あーもうこの話はおしまいつ！

「佐藤さん」

「ん？」

「佐藤さんも慣れたら、昼間だってここに来れますよ。ここはちょっと離れてるし、知ってる人に会う事はそう無いんじゃないかなあ？」

「昼でも人に、見えるようになるって事？」

「ええ」

結構広い綺麗な喫茶店。よっしーと二人で、本当に朝を迎えた。

「コーヒーだけでほんとに大丈夫か？ と思ったけど、さすがに深夜から明け方にかけては店員さんも気力が落ちるようで、ほとんど私たちは捨て置かれていた、って感じ。」

「コーヒーをどうするのか？ 私も真っ先に思った。コーヒーは私の身体とは別な物。飲んだら、やっぱり、おトイレ？」

「まあとにかく、普通に飲めば良いんですよ。心配いりません」

「そう、何度もよっしーが言うから、まあ、飲んでみた。」

「飲みましたね？ 今、飲みましたね？」

「なっ、何！？」

「佐藤さん……。この一ヶ月の間、トイレに行った事は？」

「無い……けど」

「何も食べたり飲んだりしてませんよねえ？」

「うん……何よ？ どうなるのよ？」

「……トイレに行きたくなります」

「……まあ、いいわ」

「佐藤さん」

「ん？ トイレくらい別に」

「コーヒーが出ます」

ぶっ！ って、何とか盛大に吹き出すのは堪えたけど、ちょっとこぼれた。

「コーヒーい？ ……まさかそのまま？」

「はい。淹れたてなら、淹れたてが」

……ヤダ。コーヒーは汚いイメージ無いけど、でもそれはイヤだ。

「だから、飲み物はまだいいですが、固形物を飲み込むのは止めた方が良いでしょう」

……そうだね、ヤバイよ。……こんな話はもう止めよう。

「ねえ、お金、持ってるの？」

よっしーの事だから『心配ない』って言うんだろっけ。

「あー、今は持ってますんですけど、心配ありません」

「無いのっ？ どうするのよこのコーヒー！」

「まあまあ、大丈夫ですから。僕に任せて下さい」

……私、逃げるからね。もし騒ぎになったら。壁のすり抜けしてでも。まさか！ 二人して逃げるつもりじゃないでしょうね！？ よっしーも、私と……。

「夜が明けましたね」

「えっ？ ああ」

「たまには布団が恋しくなる事もあるんですけどね」

よっしーは射し込む朝の光に目を細めてる。……十五歳……おかしい。

「じゃあ、そろそろ出ましようか。ちょっと待っててください」

よっしーはそう言って立ち上がった、レジのある方へ向かっていく。私は首を伸ばして、一体どうやるのかを監視。だけど、普通に店員がレジに入って、何か受け渡しして、レシートも？ ほんとはお金持ってたんでしょ？ よっしー。

「じゃ、行きましょう」

すぐによつしーは戻ってきて私に言う。レシートをひらひらさせて「差し上げましょう」

私はすぐにそれを掴んで、まじまじと見つめた。私達何杯コーヒー頼んだっけ？ げ、四千二百円。お預かり……五千円でお釣り八百円。

「お金持ちね」

「はは。おこずかいが結構……って言っても、もう通用しませんよね」

「そうね。またあらためて説明してもらいわ」

外に出て朝日でキラキラしてる街を眺めた。

「まだ病院行くには早いですけど、歩きだし、いろいろ散歩しながら行きましょうか」

「うん」

「佐藤さん、また手を繋いで行きますか？」

「……繋ぎたいんですよ？」

「そうですね……。僕が十五になる前だったら、とても恥ずかしくて出来なかったでしょうけど、今は、違います。佐藤さんと、手を繋いで歩きたい。人に見せたい位ですよ」

「……見せてまわるのは勘弁して欲しいけど、そうだね。何だか、堂々と手を繋いだり、楽しいよね」

「そうよ。私は自由になったんだから。したいと思う事をしよう。だから、また、よつしーと手を繋ぐ。」

病院までの道のり、どこも見知った風景だったけど、やっぱり印象がちよつと違う。昔の私と違うからなのか、よつしーと手まで繋いで歩いたからなのか、どっちかな？ んー、どっちもかな。今日が良い天気で良かった。

市立の、この辺りでは一番大きい総合病院。風邪で何度も来た事のある所。風邪ごときでこんな大きい所、来ない方がいいんじゃない

いかと健康な時には思ってしまう。だって外来の患者さんいつも一杯で、ちよつと受付遅れたらもう診察終わるのが午後の二時とか三時とか。でも、自分が風邪で辛いどうしても来ってしまう。何となくだけど、安心感。ここに、おばあちゃんが居る。

まだ早い時間だったけど、おばあちゃんは近くに身寄りが無いし、よっしーが第一発見者だったのと、おばあちゃん、どこも悪くなかったらしくて、すぐに会わせて貰う事が出来た。向かったのは三階の相部屋。六つのベッドはみんな埋まって、全員、お年寄り。寝てる人も居たから、私とよっしーは黙ったままちよつと会釈をしてカーテンで囲まれたおばあちゃんのベッドに向かう。

おばあちゃんは横になってたけど、すぐに私達に気付いた。

「おばあちゃん……」

「お加減はどうですか？」

おばあちゃんは私達を見て、ちよつと頷いた。

「体には異常無いそうですね。安心しました」

よっしーが優しく声を掛ける。おばあちゃんがゆっくりと上体を起こそうとしたから私がその背中を支える。あ……、出来る。出来た。私はちよつとびくりして、よっしーを見てしまう。よっしーは、ただ笑うだけだった。

「おばあちゃん。私、分かる？」

「……ごめんなさい。ごめんなさいね」

おばあちゃん、涙、流してる。私が見えないからじゃない。おばあちゃん、私に向かって言ってるから。

「あの時、私ね。聞こえたのよ、見えたのよ。佐藤さん、あなたが「え？ でも……」

「あなたが、必死で言ってくれてるのに……でも、でもね。ケンジが……ケンジもあの時……」

……ケンジ？

「それは……もしかしてあなたのお孫さんですか？」

よっしーが訊ねる。冷静に、静かに。おばあちゃんは頷いた。

「ケンジは、……寂しいの。小学校に上がったばかりで、まだ小さな子供よ。寂しい、怖いって、泣くの。私が、行ってあげないと……」

「おばあちゃん、そのケンジ君が、あの時あそこに居たの？」

私は感じなかった。見えなかった。あの踏み切りからおばあちゃんを見た時、もう私は興奮状態で、周りの事なんて、おばあちゃんがどこを見てるかなんて考えてなかったからかもしれない。

「ケンジが、私に早く来て欲しいって、泣くの」

それは……そんなダメよ……。確かに寂しいかも知れないけど、そんなの……。

「お孫さんが亡くなったのは、二年前ですよね？」

よっしー、ちよつと声が大きくなる。ほんのちよつとだけど。

「お孫さんは今までもあなたにそう言っていましたか？ あなたに……

……姿を見せていた？」

「いいえ、一度も……。もう、ケンジはあそこには居ないんだと思っただわ。きつと成仏して、幸せになってるんだと」

……私は、なつてない。ずっとあそこに居続けた。ケンジ君は、成仏したの？ だから居なくなったの？ 私は出来なくて……。

「お孫さんの姿は、はつきりと見えていましたか？ ……そう、はつきりと？」

おばあちゃんは力なく首を振った。

「ただ、何か光りが見えて、でも、声は聞こえてたの。佐藤さんが私の前に立ちはだかったけれど、私は、ケンジが居ると思って夢中になって……」

何て言っているかわからない。あそこに居たというケンジ君が本物なのかどうかも私にはわからないし、それ以前におばあちゃんが本当に見てたのか、それとも、そう思い込んでしまっただけなのか……。このままではまた、おばあちゃんは……？

「あなたの、お孫さんへの想いがとても強くて、幻を見てしまった

んですね」

……よっしー、そんなはつきり言ってしまったていいの？ 本当に幻なの？

「他の人が言えば信じられないかも知れない。でも僕等はちよつと違うから、信じて下さい。お孫さんが二年もの間、一度も姿を現さなかったのに、昨日いきなりお婆さんと呼ぶなんてありえないんです。お孫さんは、あなたと一緒に暮らしてきて、きつと、大好きだったでしょう。だけど、突然、引き裂かれて……。でもお孫さんは、さつき言われた通り、成仏して、幸せになつてると思います。もしそうでないのなら、きつとお孫さんが亡くなつたその日に、あなたの所に、泣きながらでも、姿を現したに違いないんです。あなたは今、佐藤さんが見えるでしょう？ 同じ様に、お孫さんを見た筈です！ 抱きしめた筈です！」

おばあちゃん、泣かないで。おばあちゃんは何も悪くないんだからね？ 二年も、辛かつたね……。

「佐藤さんに会ったから、お孫さんも居ると思つちやつたのかも知れませんか」

私に……会ったから……。

「でもほら、成仏せずに居るのなら、やっぱりこうして佐藤さんと同じ様に、会いに来た筈なんですよ。来ないのは、お孫さんが、空の上からお婆ちゃんを見守ろう、そうする事に決めたからじゃないんですか？」

「ケンジイ！」

おばあちゃんは、ケンジくんの名前を搾り出すように、泣きながら、呼んだ。

私はそつと、おばあちゃんの細い肩を抱いて、背中を撫でて、おばあちゃんの頭に頬を寄せて。

「ちよつとどうしたの？ お婆ちゃん大丈夫？ あなた達、一体何を？」

看護士さんがやってきて私達を睨みつける。

「どうしたの？ どこか痛い？ あなた達はちよつと出て！」

……説明は難しいよね。この状況では。

「やめて！ その子達は来てくれたのよ！ あなたが出て行って！」

おばあちゃん……。潤んだ瞳で、看護師さんを睨みつけてる。よっしーが看護師さんに、

「もう少ししたら帰りますので。すいません」

「そう……ですか」

本当にすいません。看護師さんとしては当然の事よね。患者さんが泣かされてるんだもん。

「おばあちゃん……」

「私がどうかしてたのね。ごめんなさい。許して……」

「おばあちゃん、大丈夫だよ。私達、全然平気だから」

「佐藤さん」

おばあちゃんが私の腕を掴まえる。

「あなたは、急に居なくなったりしないで欲しいの。ケンジとは、もう二年も経ったんだし、頑張つて、理解するように頑張るから。

でもあなたは、まだ居るんでしょ？ いつかあなたも、ケンジの様に幸せになる時が来る。でも、その時は急に消えたりしないで欲しい。あなたを、祝福して……それで……」

「おばあちゃん……。ありがとう……。約束する。約束するよ」

しばらく、おばあちゃんと抱き合つたまま。……絶対、急に消えたりしない。勝手に居なくなったりしないよ。

「入院は長くないようですけど、聞いておられますか？」

「ええ、先生が今朝、今日は休んで明日退院でいいでしょうと仰つたから、明日には」

「そうですか。じゃあ、明日迎えに来ますよ。時間は看護師さんに聞いて早めに来ておきますから」

「でもよっしー、車とか無いと……」

「タクシーがいっぱいあるじゃないですか」

「あ、そうか」

もう、タクシー使うとかそういう感覚がここ一ヶ月無かった。『人』の様に生活するという事が。

「じゃ、ゆつくり休んでください」

「おばあちゃん、また明日ね」

「ありがとう。ありがとうね」

随分、久しぶりのおばあちゃんの笑顔。良かった。ほんと、良かったよ。

「ちょっと座りませんか」

病院の建物を出てすぐのところにベンチがあつて、周りは緑が一杯で、ちよつとした公園みたいになつてゐる。私とよっしーはベンチが汚れてないか確かめて、腰を下ろす。

「さて、あのお婆さんのお孫さん、どこに居るんでしょう？」

「……何それ？」

「お孫さん。どこに行つたのか、気になります」

「よっしーさつき自分で、ケンジ君が成仏した筈だつて……」

「ええ。そう考える方が良く、それと同様であると考えるのが妥当な段階に至つてゐる、という可能性が高いから」

何言つてゐるの？ 意味が分からない。

「……ちよつとまだ佐藤さんには難しいかと」

「何よそれ！ 私には分からない？ あなたには分かつて私は理解出来ないつて言つての！？」

私は思わず立ち上がった、よっしーに怒鳴つた。まだ難しいつて、馬鹿にして！ そりゃ色々私の知らない事をあなたは知つてゐるみたいだけど、私だつて、理解出来るわよ！ 三つも年下の癖に！ 説明したらいいでしょ！ 早く言いなさいよ！

「佐藤さん、僕も……どう、あなたに言えはいいか、迷つてゐるんです。いや、言わなくてもいいんじゃないか、とも考えたり。でも……」

……」

よっしーはそう言つて、頭を抱える。な、何よ。余計に不安になるじゃない。

「あの、佐藤さん、座ってもらえませんか？ 失礼な事言つて、ごめんなさい」

「う、……うん」

何だろ？ ほんとに頭抱えちゃう様な事つて、何なんだろ？

「あの、人つて、死んだらどうなると思います？」

「え？ それは、あれでしょ？ 死んだら」

「あー！ いや、今の無しで。言います。おかしかったら笑つて結構。大いに笑つてください。でも、怒るのは、……無しで」

……。

「人は、死んだら、体が無くなります。物質的な体が」

……それで？

「それだけ」

……。

「あ、それから、また体を持ちます」

「え？」

「それだけ。以後繰り返し」

「はあつ？」

「あ、最初の体がなくなるつてのは、今の佐藤さんの状態です」

「……よっしーも、でしょ……？」

「ええ……まあ」

「分かつたわ」

「え？ ……それは……良かった」

「私の今の段階が、よ。で？ 次は体を持つと。その間、どこに行くの？」

「いや、だから、次は体を再び持つ段階で……」

「それまでよ！ どこに居るのよ！」

「どこつて……、佐藤さん、今ここに居るじゃないですか」

「天国とか！ 行きたくは無いか地獄とかよ！ そこはいつ行くのよ！？」

「それが……ありません」

……無い？ そんな訳ないでしょ？

「佐藤さんは、いや、僕達はこうして現実の社会に体だけが無い状態で、生きてます。どこにも行かない。行く所も無い。この世界の中だけで、体を持ったり、無くしたり、それを繰り返すんですよ。そして、ずーっと、生きている」

「神様とか……居ないわけ？ 『成仏』ってというのがダメならキリスト教とかはダメ？ 神様の所に行くとか……」

「神が居るかどうかは、分かりません。いや、絵的には居る方が分かりやすいかな？」

「んん？」

「神が居て、自分の部屋だどこかに、鳥カゴをぶら下げてて、その中にこの世界がある。というか、その鳥カゴが、この世界。でも、ものすごく広いんです。何でも出来るし。でも、鳥カゴ。檻、ですかね」

「でも、でもさ、この世の中の人、みんな天国とか成仏とか信じてるんだよ？ 私も信じてるけど、これって大昔から言われてる事じゃない。色んな国でも。それが無いなんて……」

「言ってるだけです。願望です。体があると苦しんだり痛い思いもするから、死んだら軽くなって神様の所に行って、遊んで暮らしたい。そう思えば、まあ苦しいのにも少しは耐えようかって」

「何で！ 何でよっしーにはそれが分かるのよ！ それが間違いかも知れないじゃない！」

「間違いだったらどれだけいいか……」

「私、信じられない。信じないからねっ！」

「ええ、まあこれは信じてても信じなくても、同じ様なものですから。それに多分、お孫さん、もう次の体を持って、どこかに居るというのが僕の予想ですが……」

「え？」

「僕の説では、天国で遊ぶという部分が無い。なので、今も僕達と同じ様にしているのか、もしくは次の段階である再び体を持つて生活を始めたか　どんなに早くその段階に移行してもまだ二歳ですけどね。で、僕達と同じ段階には無いと考える根拠は、彼はまだ幼かった。家の近くで体を失う事になって、どこに行くでしょう？」

「このあたりで迷子にはならないんじゃないですか？　お婆さんは近くに居る。何故か遠くに行ってしまうなんて考えにくいんです。えーっとこれはですね、佐藤さんや僕がどこかに行くには、自分で行かないといけない。光が降って来て連れて行かれる事も無い。彼も同じです。僕は体を失った段階の人がすぐ分かります。かなりの範囲で。でも彼は居ません。じゃあやっぱり、僕達とは違う段階に居るという事になる訳です。そしてそれが僕の考える、いわゆる『成仏』と同等と判断してもいいだろうと思う状態です。ただしそれは僕達の段階から次へ移行したから『僕達はその捉えよう』という考え方であって、実際は『成仏』よりも『誕生』でしょうか。いや、『回帰』かな？　そして、それは、『出来た！　良かった！』という類の物ではなくて、そうならなくてはならないんです。義務、みたいな」

「あ、あのさ、今度、紙に書いて説明してもらってもいい？」

「あー、はい」

「よっしー、今ちよつとがっかりしたみたいね。……ごめん。」

「あ、檻のイメージは分かったよ？　鳥力ゴか。でももしそうだったら、何だか悲しいよね」

「んー、でも無限に広いんですよ？　端を見ることなんて一生、いや、どれだけ時間があっても無理です。だから、その力ゴの格子を目の当たりにしてストレスを感じる事は、あり得ないと言って良い程ですよ。それよりも大変なのは　」

「何があるの？」

「僕達が体を失う直前に持っていた期待。あれが、全く見当違いだ

「ったという事です」

期待。苦しい想いから逃れて、全て消し去って、柔らかい光に包まれて、幸せを感じる私。何度も想像したんだ。そして私を苦しめた人達を高めから眺めて、鼻で笑ってやるの。せいぜい傷付け合っ
てなさいって。私は嫌な毎日を、人間の生活を捨ててやる。そう思
った。

でも、それは出来ない？ よっしーの話はまだよく分からないけ
れど、確かに私はあの日から一ヶ月経った今も、期待した状態にな
ってない。ただ体を失っただけで、まだ生きている。この世界に。
このまま続く可能性は十分にある。

よっしーは体を失ってどれくらいになるんだろう？ まだ、自分
からは聞けない。だってそれは、彼の、苦しみや悲しみのピークの
時の事を聞く事だから。

このまま、どういう風に生きていけばいいんだろう？ だんだん
知り合いも増えて、体があつた時と同じ様に、私の人生の第二幕が
作られていく。次は、失敗出来ない。だって、もう逃げ道が無いか
ら。私が鳥力ゴに居るのなら、次の段階は、あの死にたくなつたあ
の生活。信じないって言っただけど、不安になる。

「佐藤さん？」

「えっ？ あ、何？」

「今からそんなに考え込まなくても時間はたっぷりありますよ」

「いやー、別に考えてる訳じゃないけど……」

「とにかく、僕達は、生き続けなきゃいけないんですよ。僕達は今、
自由になつたようにも思える。だけど、これはちよつと問題のある
自由なんです。……えー、ここところはまた追々話していきまし
よう。いずれお互いに、真剣に考えなければいけない部分で……っ
て、まあ、今の所は、腹が減らないのと病気になるのが『救い』

だったなー、くらいにしときまして」

「はは、もうちょっと豪華なのが良かったんだけど」

「今の間に、この世界の事をもっともつと知っておくべきだと思います。お互いに。僕達はまた、この世界で生まれるんだから……今の状態になって思ったんです。僅か十五歳で自分が認識してた世界がなんて狭かったのか、を。何度も何度も苦しみにつかつて、それでもそれを破ろうとこたわつて。世界は一直線の棒なんかじゃない。丸いんです。前に進まなきゃって言うけど、じゃあ前は後ろの一番端っここから走ってきたのかと。どうせ途中からだろ？ 端を見たことある奴なんていないのに。広大な鳥力ゴに止まり木が横たわつてて、その上をみんな進みたがってる。壁があつたらもうお手上げて、あきらめてしまふ。でも鳥力ゴですよ？ おまえは鳥じゃないのか？ 飛べよ。回り込めよ。いや、止まり木の端っこ目指してどうするんだ？ 世界は無限に広いのに。好きな方に飛べ。どこもかしこも『前』なんだよ。体を捨てて終わるうなんて思うような苦しみは足で泥でもひっかけて放つたら良かったんだ。別な方へ飛んでいったらいい。この世に『逃げる』なんて無い。この鳥力ゴに逃げる場所はないから。『諦めずに突っ込め、逃げるな』としつこく言ってくる奴は、ただそこに僕を留まらせたいだけの連中だった！」

「よっしー、……熱いね」

「……少しすつきりしましたよ。たまにはこういう面も見せて、佐藤さんの乙女心をくすぐらないとね」

「……それ、言わなけりや、かなりいいトコまで行ったのに」

うん。ほんと、いいトコまでいつてるよ。よっしー。もう一息かもね。

「では行きましょうか。世界を知る旅へ」

は？ どこに？ どこで分かるのそんなの。歩いて行く気？

「とりあえず、今日は佐藤さんにサービスしましょう。遊園地でも

行きますか。まだ時間もたつぷりあるし」

「……そこでどんな世界の謎が分かるのかな？」

「その前にまず己を知らないといけません。しかし、自分で自分はよく見えないもんですよ。ですから、お互いを観察する事にしましょう」

……何だか、ヤだ。

「コーヒーカップってあるでしょう？ あれにカップルで乗って、『アハハハ』としっかり発音しながら廻っていると、その世界の神が憑依して、本気でそう笑えるようになって幸せになれるそうですよ」

「イヤ！ 絶対やらない！ その世界ってどこの世界よ。そんな神、絶対居ない！」

それに、お互いを知る事と関係ないじゃない。

「んー、勿論、信仰に関する自由は僕達にも許されるべきですから、尊重します」

ようやく私達は病院のベンチから立ち上がって、歩き出した。本当によっしーは遊園地に行くつもりらしい。電車に乗るって言う。ほんと、変わらない。何も変わってない。こうやって今、ここに居ると、やっぱり私は『生きてるのか。生きなきゃならないのかあ』って、思う。また辛い事が起きるんだろうか？ でも、出だしは順調かな？ おばあちゃんはいいい人だし、よっしーも居るしね。あの難しい話は、まあぼちぼち考えよう。その内、よっしーがまた解説しだすわ。

私達は電車に乗る。人の波に乗って。切符をよっしーが買って、並んで地下のホームへの階段を下りていく。よっしーの、ちよっと熱くなった左手を握って。

下から吹き上げる風に、私達は少し押された。

エピソード

ある日、よっしーが会わせたい子が居るって突然言った。近くに居るからって。その子も、私達と同じらしい。前に行った喫茶店。あそこに居るからって、私は連れて行かれた。一人で喫茶店に入るって事は、どうやら私よりも経験豊からしい。変な表現だけど。

「よう」

よっしーが声を掛けたその子は、……女の子。よっしーと同じくらい。ふーん。そう、女の子。私、邪魔じゃないかしら？

「ねえよっすいー、凄く暇なんだけど」

ん？ 今なんて言った？ よっすいー？ それがネイティブの発音でわけ？

「じゃあ寝てろ」

「フン」

……よっしーの喋り方が、違う！ 普通の男の子っぽい！

「佐藤さん、どうぞ」

席に着くよう促すよっしー。

「フーン、あなたが佐藤さん？ 災難ねー、よっすいーに捕まるなんて」

「え？ はは……」

うーん、慣れるのに時間掛かりそう、この子。

「こっちは木原みゆき。んー、友達です」

「佐藤、明子です。初めまして」

「よろしくー。ねえねえ、あきちゃんてさあ、高校生だったんでしょ？」

あ、あきちゃん？

「彼氏居なかったの？」

「いきなりそんな質問するな。明子さんに失礼だろ」

「あきちゃん十七だっけ？ 私、十三なんだ」

「へー、そうなんだ」

しまった！ よっしーが私を明子って呼んだのに突っ込むきっかけが持ってた！

「いつもよっすいーと一緒にいるでしょ？ どこがいいの？ こんなの」

いや、いいとも何とも言っていないけど……。確かに一緒に居る。だって、帰る場所だって無いし……。そういえば、二十四時間ずっとだ……。これは、そうなるよね、普通。

「普通、私達みたいな若い女の子は、よっすいーみたいな相手にしないんだからね。よっすいーは感謝しなさいよ」

「……わかってますわかってますよ」

「……はは、てつきり木原さんが杉田君の彼女なのかと思ってたけど、違うの？」

「杉田君で、何ですか！ 今まで『よっしー』だったのに！」

「何ででしょうねー」

勝手に名前で呼んだ罰なんだから。

「あきちゃん、よっすいーの歳、聞いたことあるのお？ 彼女なんてありえないって」

「え？ 歳……十五、だよな？」

「みゆき！ もう止める！ もう十分だ！ 佐藤さん、そろそろ行きましょう。ちょっと紹介したかっただけですから」

「フ、よっすいー、会わせといて私が何も喋らないとでも？ あきちゃん、よっすいーはねえ、十五歳だけど……」

何？ 十五歳だけど？ 思わず身を乗り出す私。

「最後の誕生日が来たのは、二十年前でしたあ。う、うはははははははは」

……。

「佐藤さん！ 僕は十五なんですって！ いやホント。歳、取らないんですから！」

「でね、体が無くなつて便利になっちゃったもんだから、何したと

思う？」

「み、みゆきっ！ 黙れっ！」

よっしー本気で木原さんの口を塞ぎに掛かる。……余程後ろめたい事の様ね……。

「十五歳は」

「色々おー」

木原さんの口は、レジスタンスの猛攻をぐぐり抜けて、確実に、情報を出す。

「街中の若っ」

「女」

「裸をつ！ 全」

「覗」

……私は静かに立ち上がる。よっしーの体が固まるのが見えた。

「いくらなんでも、いかんよね」これは。若気の至りとはいえ、うん。いかんよ、三十五歳独身」

彼女は戦いを終えて休息のジューズ。

「独身は当たり前だろう！ 俺は十五だっ」

「……私、今日はもう帰るわ」

「さ、佐藤さん、あの、はるか昔の……」

「さよなら。変態親父の杉田さん」

私はにつこりと微笑んで。

喫茶店を出る。ああ、今日も空気が美味しい……街がキラキラしてる。今日は何しようかなあ。

「佐藤さん！ 佐藤さあああん！」

この叫び声を聞いてから丸々四十八時間、私はよっしーとは口を聞いてやらなかった。短い？ あなた、四十八時間がどれだけ長いか知ってる？ 表に四十八時間立ってみるといい。勿論立ったまま寝るなんて論外だからね。私がもし、よっしーを罰として立たせるなら、そうね、数万時間でも足りない。だって彼、そんなの全然堪

えないんだもん。私の気が済むまで、って事。

待ってる私も退屈だから、私の方が先に話したくなって、一緒にどこか行きたくなるって訳よ。

完

広大無辺の、自由なカゴ（後書き）

あとがき

現在、投稿連載中の「流浪一天」という武侠小说が私の初めての作品なんです、そちらを目にした事のある方は、この「無辺の鳥かごで」を読まれて、『ああ、ムシャクシャしてやったんだな』と感じておられるのではないかと思います。確かにそんな感覚もありまして、武侠小说では表現も堅くなりますし、ちよつと弾きたい、みたいな気になった訳です。ですので、かなり勝手に放題な文章を短時間で書きなぐったというのが本当の所です。

物語は「え？ これからじゃないの？」と自分でも思ったりしますが、ひとまず終わりです。ですが、いずれまた時間が取れば続きを書きたいと考えています。今回のように衝動的に書くか否かはまだ定かではないのですが、何とか形にして、また読んで頂く事が出来ればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5311d/>

無辺の鳥かごで

2010年10月10日18時14分発行